

丁丑雜記

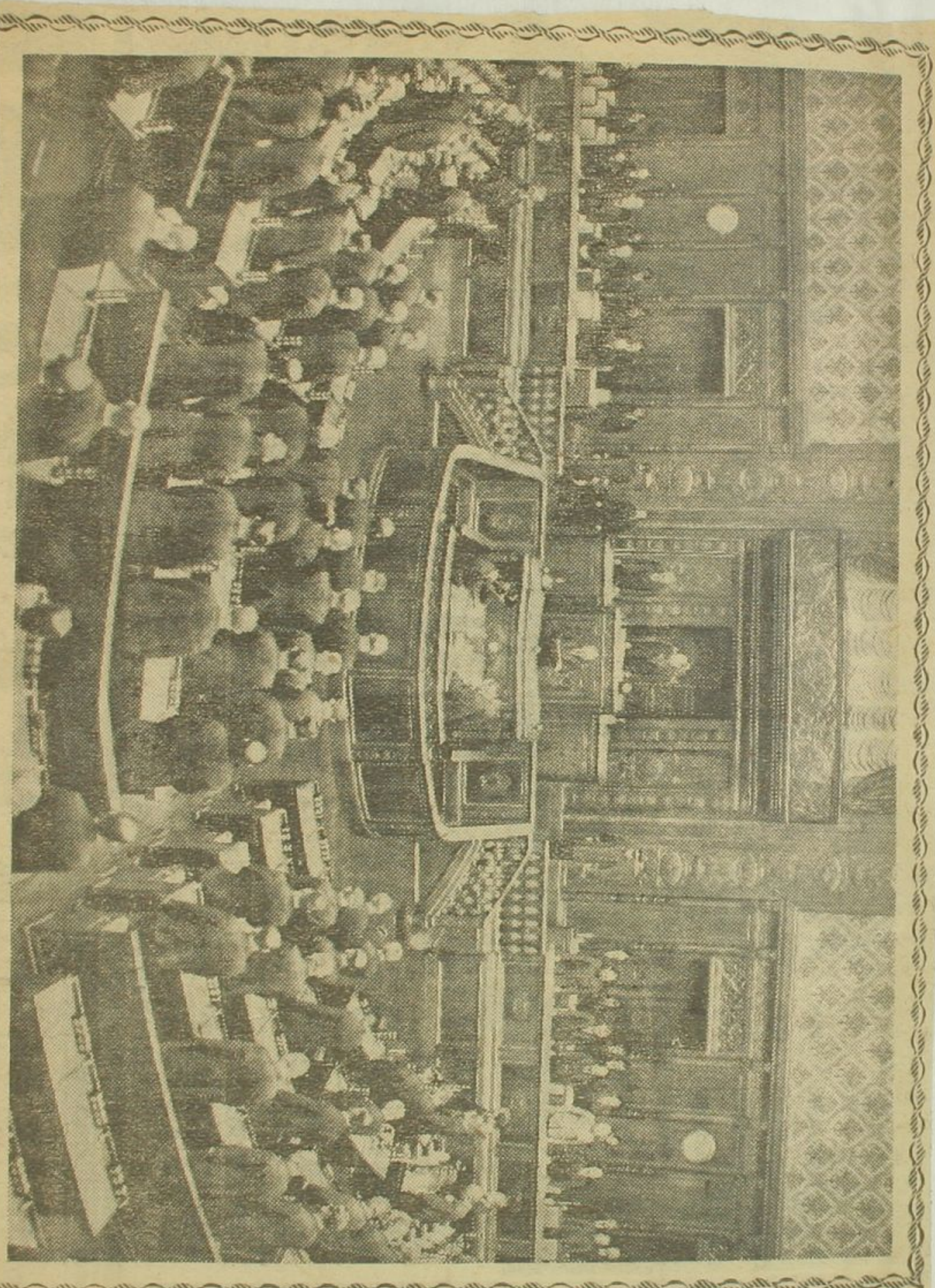
三

昭和十二年三月下旬起筆

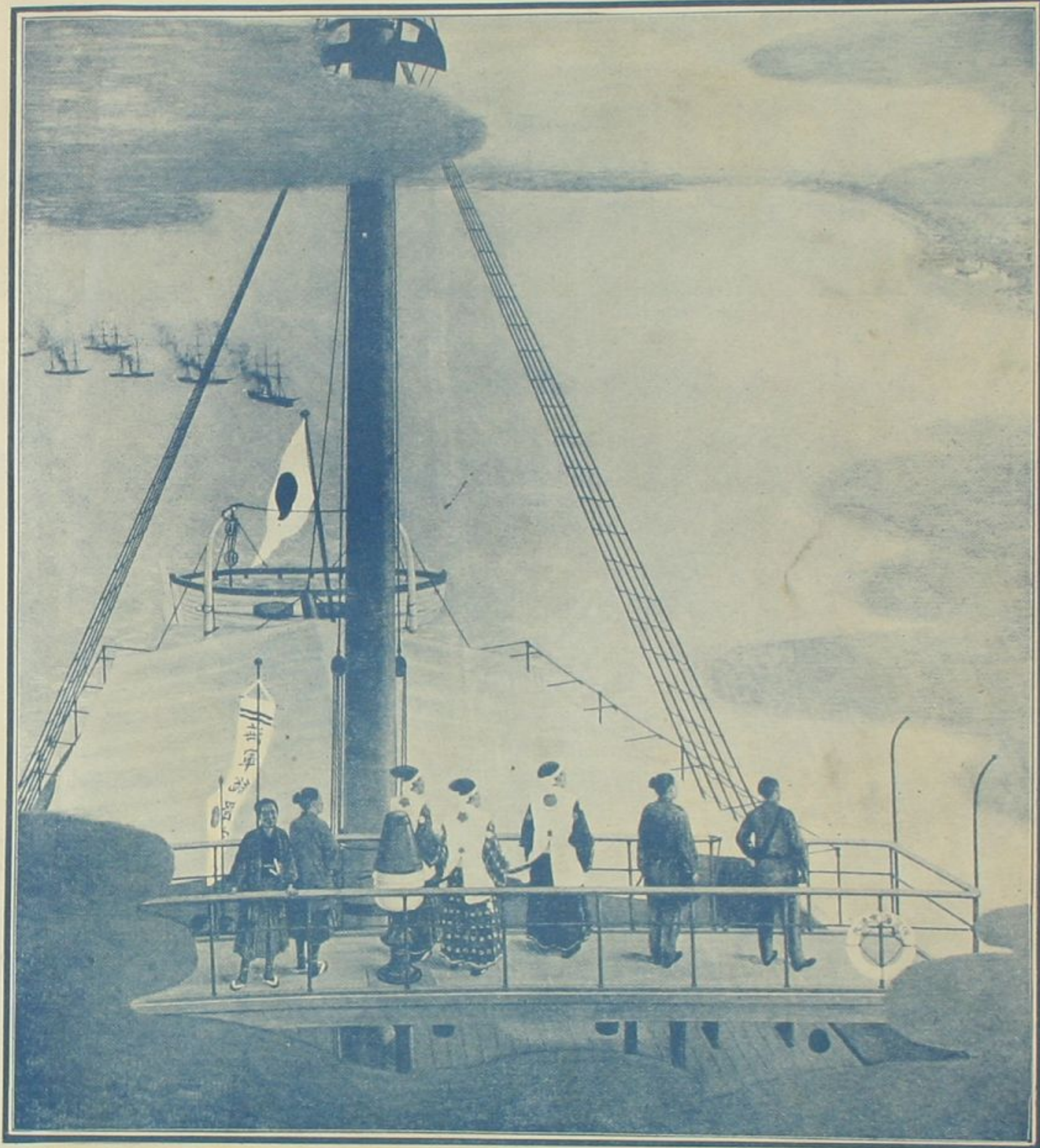
特別
14
1919
484



176749



集畫壁館畫繪念記德聖皇天治明



大阪行幸諸藩
軍艦御覽

明治元年三月二十六日 屏太
八月十日 天皇、天保山、於
初、諸藩、軍艦ヲ觀給フ。
勝、利、歸、見、羽、戰、官、軍、久
以、保、藏、下、目、大、選、大、軍、
建、議、天、廷、議、物、議、招、カ、ン
ヲ、止、メ、恐、給、メ、給、メ、給、メ、
議、決、ス。天、皇、之、ヲ、嘉、納、シ、
是、月、二十、一日、十四、日、神、器、ヲ
奉、上、テ、是、日、發、シ、京、外、大、阪、
幸、ス。行、幸、ナ、レ、テ、所、在、六、日、早、初
且、川、下、所、在、天、皇、御、早、初
治、川、行、幸、ナ、レ、テ、所、在、六、日、早、初
親、王、聖、護、佐、賀、藩、軍、艦、電、流
丸、本、宮、佐、賀、藩、軍、艦、電、流
上、軍、艦、流、リ、率、キ、米、島、山、洋
熊、本、宮、佐、賀、藩、軍、艦、電、流
ニ、佛、國、軍、艦、ヲ、祝、賀、ス。見、ル
諸、國、亦、佛、國、軍、艦、ヲ、祝、賀、ス。見、ル
幸、航、ル、事、終、テ、南、流、ル、所、ニ、還、歸、ス。
六、日、明、治、元、年、三、月、二、十、日、於
ナ、リ、誘、導、航、行、中、ノ、流、光、景
揮、豪、者、侯、爵、岡、田、三、郎、助、映

唐の軍艦見事なる光輝ありしを(查)通りに(唐)思するに
 供に所謂る年の功に、今年に(後)大略の(唐)を(知)りし。
 偶に唐の雑記を閲するに、久遠り七十年前の今日海軍
 の御親領の言、公出せられたるに、三月二十日、明治天皇
 の寶曆十七日、其の時、あるをいひ、親艦式の大改の天
 保山沖に、行ひんば、聖上も北時、如く海と神遊なうし、海
 とよあとの大きい(よ)れば、(よ)と近侍も仰せらるれば、とある。
 海軍總督として此の日の司令官を承はつた聖護院宮親王は
 伏見宮親王の御子で、補翼王子(文)、參謀院田大納言等を隨
 へて旗雷流丸に御乗込みになつた。
 聖護院宮の此の日の御服装は、蜀江錦に茶色の御直垂で、龜甲の
 紋様に菊の模様を交へ、靴は萌黄の皮靴を用ひられ、毛袴の御太刀
 を佩かせられた。太刀は黄金の鑲に細絲卷の柄、脇差は鱧皮の柄に

黄金の鑲、靴は鰐地に菊散らしといふ美事な御佩刀であつた。之は
 後に北白川宮から朝廷に献上されたといふ事である。又參謀の服装
 は青地錦の直垂であつた。
 雑記より右の如く書かんと
 あり



此日 親艦式と冬加の艦船

電流丸(肥前) 意皇丸(肥後) 千早丸(久米) 三
 和丸(大津) 華陽丸(赤松) 義年丸(筑前)
 の六隻で、此の艦船が合計二十四艘五十二噸し、なるか
 へん。尤も他に、冬加の艦船七艘、冬加を合計
 して、今この艦船は、計り、冬加の艦船七艘、計り、冬加の艦船
 横濱沖の親艦式の大艦船百二十一隻、総噸數
 八十四萬七千噸と、第一の差がある。減入、今其の
 感、皆く、いひ、
 此日の旗艦「電流丸」式の御模倣「左」の如くあり

天保山ニ於テ海軍爲ニ觀覽ニ卯ノ半刻御發聲、御道筋ハ御本門ヨリ
 心齋橋通り、四軒町、大豆葉町、七郎右衛門町、西國橋、玉水町、
 常安橋通り、玉江橋ヨリ堂島濱筋鹽津橋ヨリ安治川筋、安治川橋

通御ニテ富島二丁目濱ヨリ御乗船被レ爲遊、兵隊ノ前軍中軍ハ左
 ノ川岸、後軍ハ右ノ川岸ヨリ隊列ヲ整ヘ、正々堂々、御座船ノ左
 右ニ隨從行進シ以テ護衛セリ。午ノ刻天保山ニ御着船也。

さてその日の正午天保山の天覽所へ御座船が御着きになると合圖の青旗が高く掲げられついで朝日かゞやく鐘の御聲が懸るのを見て旗艦電流丸から二十一發の祝砲が發せられた。碇泊中のフランスの軍艦デュプレックスからも禮砲が發せられた。そこで先導の電流丸から各艦に信號を以て傳へ一齊に碇泊して運動を開始した。先頭の電流丸に續航して天覽所の前を通過し西に向つて軍艦陣の鉞路を執つて進むこと四五海里、そこでぐるりと轉回して元の位置にかへり二列艦陣に碇泊して此の日の演習を終つたのである。

電流丸には海軍總督聖護院宮のほか、肥前藩主鍋島直大は艦隊指揮官の資格を以て坐乗し、同藩士眞木長義は艦長として乗り込んでゐた。

此の日は天氣晴朗、海上波靜かにして遊路の鳥影もあざやかに、武庫の山々色うつくしく絶好の觀艦式日和であつた。

鍋島直大は此の日の感激を述べて、
御いくさにもなる船の數々の

つかさとなるぞ譽なりける

と其の日記に書き留めてゐる。

海軍總督聖護院
前軍艦電流丸ヨ
陛下ヲ祝シ奉ル、
導シ兵庫ノ方へ
碇泊ス。八ツ時
ヲル。
で、觀艦式その
世界を驚する帝
監がある。

心得

や自辨

のこし

のこし

のこし

と、先づ當日供奉の諸隊士に對して達せられた心得書がそのまゝ物を言つてゐる。

- 一、供奉官、公卿、諸侯乗馬の事。
- 但中軍の輩可シ爲シ歩の事。
- 總裁、輔弼兩人先後騎馬供奉の事。
- 一體、鎧直垂の事。
- 但花籠の品成丈無用の事。
- 一、公武共從僕、侍二人、下部二人、口附二人の事。
- 但侍衣籠は羽織袴の事。陣羽織無用の事。
- 一、主従一同腰兵糧の事。

但自分用意の事。

但例朝飯受取候畫の分も受取腰兵糧に可致、夕飯は先方に於て小堀より廻す可候事。兩度の分は竹皮包に候事。

一、船中從僕一人たる可き事。
- 但御座船並込の面々は、從僕無用たる可く、尤も別船にて御列外に差出す可き事。

一、兵隊の儀は、中藩已上百人、小藩の儀は一小隊たる可き事。
- 一、御乗船の後、前軍中軍兵隊各順席を以て左の川岸、後軍同斷右の川岸より御座船に隨從し行進御守衛致す可き事。
- 一、御用物其外又供の儀は、左の川岸通行の事。
- 一、入夜の節、提燈自分腰指其外小丸一ツ馬提燈一ツたる可き事

但提燈雨具船を以て運送の事。(非藏人日記)

供奉の面々が鎧直垂の軍裝で扈從した觀艦式であつた



の老朽大なる教授大受一印と云ふ記名揚士公訪い未の此人
ハ遊乐的ニ楊朱曼陀羅の研究をやつてゐる。志きううに
大隈藩の北平三井子の方の楊朱曼陀羅を讀むと述べ
志きうう大隈家ニ就き光子の方を往々の所問をやつて
あつた。いろく分らんことかあつた。私方、未此の此が其
の詞、これ一二のこのことを大隈家ひも不ゆひある位だ
から自分も、切論合つて居らん。あつた。研究の結果も
すきあつた。興味を覚え、三井乃自七十を以て時心の
此堂虎田清ハ厨子ニ納めをあり、扉の左ニ照憲白皇太后の
御名を録し、背而漢文ハ龍文ハ納し、ある。さう一
つハ弘法大師の坐像を楊朱曼陀羅の傍に出して、あつた。其の
が大隈家、一口宛存し、あつた。今休むつて心つて、こと

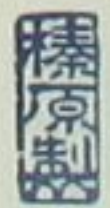
此の内の此の大隈家の記録がある。利を心する西陣の
 川崎甚兵衛といふものである。京都へ下村正太郎を以て
 或許送り出した油を賣ることを申す。此の照字は皇太后
 の御制衣の記して千重派の御用といふのであつて西人
 の利を利を興つた。曼陀羅の表匠の誰んか考ふてこれ
 をも賞す可いといふ。西木直彦、経かして佛像と大師の像
 の毛冷に誰んか千重派といふ。自分も自分打ちをいふといふ
 と考へれば、確實といふから此の點を西木が承かしてゐる
 ことと注意して大隈協書の佛像の顔面を拵大といふ
 ことを示せば、其の字をいふことと現原品の面貌も
 よく傳はつてゐる。此の拵大字といふ細糸の像の所と
 備二像の比附といふキリ合つたやうなものである。列に歎徴候



大隈大い比耦也。此の如何も細いといふ。五細をユツ
 比ふといふのは。さういふユツと云ふことと云ふ。さういふのが
 西木三井子か自の膝の上でユツ目と云ふ大隈家といふこと
 である。此の意はさういふ。昔千重といふので、西木の筆
 の心後、原料を得た。相の骨の折れといふことといふ
 る。大隈氏の云ふ、中野正の折れといふ。曼陀羅といふのは
 ちよと傳説の事かといふ。或は大隈家の御用といふ事
 知らぬといふことといふ。而して蓮花の折れといふ。折れといふ
 事かといふ。さういふことをいふ。折れといふ。折れといふ
 ことをいふ。断定し、或は昔の折れといふ。折れといふ。折れ
 と云ふ。就て程々説く。大隈家の曼陀羅研究の
 意かといふ。折れといふ。折れといふ。折れといふ。折れ

又人ことをゆす。

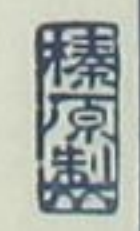
口其新法に梅を執るる雜感を書いたる、更にも二三の
所風を追録するると、人々多く梅花を賞するを切つて其の樹
木幹を賞するを知らぬが、梅の賞玩點は樹幹も七ある。
若木の野梅を花はめりて、樹が老くと趣かまひ。
折り折れ元は元根、其の横はく黒く、少くも樹幹に
び、男子的び、ブツキラばうに屈曲して、龍の跡し、
元、枝條様牙錯綜して、事散して、向巧致るき、所は即つて
趣かある。梅を賞する人多く、樹下も立つが、梅香をかぐると、
花を賞するも、仰ぐ見るも、高の所から見おろす方が、
梅林の花は別れ、高の所から見おろすと、根の元おろすと、丸
く、香一白花の海の如く、熱海の梅(とる)一方、
高



い道路が、開けし、自分、いつても、道から見おろす、梅
の梢の上を、平視、満目、一白、梅の葉を、満喫する、
無い、よ、よ、泳め、ある。個人、定國、梅を植へ、
自分も、ゆり、元、経験か、六、此、横岐、家、
趣、め、感、比、北、家、の、ま、
く、の、梅、が、あ、り、比、が、ま、い、
う、ま、高、い、よ、よ、
の、梅、の、姿、態、の、意、
己、高、の、消、道、
の、趣、却、し、と、心、
糞、斜、り、映、す、る、
海、ん、の、甲、冑、も、ま、
い、熱、海、の、梅、
道、の、塔、式、
白、壁、

樹梅の空気が、少しも横斜の壁面と為る。この間、よ
い工本を感じん。梅、西洋に伝来無へ。南画得、
ある。洋人の月下の梅の園を、見れば理解かつ、
外、西洋の梅は相違なく、文字が、
として、
空、
は紅を、
紅が輪、
純粋の紅、
茶の庵、
す、
心せ、

人との、
年、
香、
いと、
わ、
あ、
梅、
さ、
深、
う、



梅散、
煙霞、
時、
の、
几、

人との、
年、
香、
いと、
わ、
あ、
梅、
さ、
深、
う、

梅一りんりん
不しのあはれ、かこ

真山氏

似死位可身飽
死亦不恥
三山中 吟梅漸
云あ、

梅の香は七
一振心 刊
心月

若問梅消息
且待鶴啼来

梅花未放去
生香

瓶梅表不御
の梅 梅
秘来 途
梅 梅
醒 梅
伝 梅
官 梅

いん 梅
かく 梅
の 梅
梅の 梅
梅の 梅
三味 梅
の 梅

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

我念梅花、梅花念我

一乃未媽也、月下、任人、半面、歸牖、鄰家、無渡

倫香、云、不禁、清風、自在、吹、小、竹、漢、家、梅

細嚼梅花、後、漢書

半馬、狂、雌、僻、夢、花、不、厭、貧、郎子元

香中、別、有、秋、情、物、不、知、寒

交似、梅花、疎、更、佳

美人、翻、作、羅、浮、夢、送、出、孤、村、空、士、家、一、片、紅、雲、深

不、辨、是、人、家、共、是、梅、花、席、伴、也、亦、是、為、梅、花

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、



梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

梅の白きと、ぬい紅は、気あり、送令流、うて、

の便あひある。支那行人の自見、若何極海島、且時時帰来して、
 自分此の句を讀み喜んぶ。未だ^{（未だ）}此の句に申す中、眼中の未だの思ひ
 をうす。

榎木の竹い落唱と云ひてゐるを、送しむる事。

晝日尋春不見春、芒鞋踏遍^{（踏遍）}蹴頭雲。归来
 撼梅先嗅、春在枝頭已十分。

自分が高屋敷昌の顔面を柳毫を頼まん、又成後の似
 と名ぬ。松梅無條と雅化して書いたことも想ひ出す。
 條の字を捨あす、さあどの苦心があうた。
 自今か往年依酒を頼み、時明徳市の御遺跡を移し、又此
 念之御遺跡之枯れ、古木のあつた、一片を申受けて、そ
 んとあまぐ持ち帰る。濱打花六、松とて、遺印杖を製

榎木

「旦の四字の刻を頼ん、その印文、明徳出雲禮の、但、
 承久遺跡」と刻してあることを想ひ出す。
 ○近刊の雅俗古
 志跋「ぬめあさ
 文三奥平追蛇巻
 ありや伊藤氏巻
 茅余の日記人三
 寸、記さるゝあさ
 冬入巻折
 ここのここのぬめ
 をぬめあさ」
 三月十九日

北辰隊は戊辰の役に、葛塚町の大庄屋遠藤七郎が、蒲原地
 方の同志を募りて組織した、三百餘人の農民兵で、自分が隊
 長となり、伊藤退藏を監軍とし、官軍の先鋒をつとめ、若松
 開城の後、越後府に歸屬して居たのを明治元年十一月、奥
 平謙輔が佐渡知事として赴任する時、其手兵として佐渡に
 ついで行つた。
 是より先き佐渡では、三百餘人の地役人が一致して佐幕を
 唱へ、その子弟百五十人は迅雷隊といふものを組織し、相川
 町磐石山の東照宮に集まり、儒官則山渡北の起草した祖廟齋
 盟記を讀み上げ、血盟して直ぐにも越後の佐幕軍に應援する
 計畫であつたが、薩摩の軍艦が小本港に入り、隊長中山信安
 を喚び出して、不心得を吐り付けられ、邊巡して居る内に奥
 羽も平定し、迅雷隊もやむやに解散した。

越佐幕未遺聞 (二)
 笠原 軒

然し迅雷隊の計畫も溟北の血盟文と共に、疾くに或者の手
によつて越後府に内報されてゐたので、謙輔が北辰隊を率ゐ
て寺泊より小木に入港した時は、隊士は悉く弾を込めた銃口
を、陸に出迎へた地役人に向けつゝ上陸した。そして上陸す
るや否や、土地の赤塚、塚原兩家を襲つて一齊射撃を加へ、
それから途中の金丸村でも、若林と云ふ家に鐵砲を打込みし
た。之等は何れも土地の豪族で、兼て農兵を集め、不穩の計
畫をして居るとの噂が越後府に内報されて居たためであるが
然し之れは眞先に島民を威嚇する爲の策略であつたとも云は
れてゐる。

かくして相川の舊奉行所に入つた謙輔は、悉く地役人の家
祿を取上げ役向を免じ、代りに北辰隊の遠藤、伊藤等重立つ
たものを役人に任命した。翌々日は圓山溟北を喚び出し、例
の迅雷隊の血盟文をつきつけて詰問した。

其文章は漢文で書かれ、最初に徳川三百年の治績を叙べ、
次に伏見の變の正邪を説き、保元治承の史實を擧げて臣子の
本分を論じ、吾等は桀の犬が堯に吠えると同義である、殊に
至尊御幼冲に居らせらるゝ現在、施政の方針も詔勅も、出處
は知る可くもない。今一旦朝敵の名を被つても、百世の後に

は必ず公論があるであらう。彼の大藩を擁しながら、人倫の
道を辨へず、去就を觀望したり、屈伏してゐるものと氣が知
れない。吾等は生れて徳川の臣となり、死して徳川の鬼とな
れば本分である。云々と述べてあつた。

其日溟北は何時ものやうに子弟に教授して居たが、喚出し
を受けると早速出所し、憶する處なく信する處を陳べたので
謙輔も初めは小癪な田舎儒者めと思つてかゝつたのを、反つ
て感心して、

「此土地柄としては無理もあるまい、小國たりとて侮れぬ
な」

と云ひ、文章の出來をほめ、それから溟北の人物を重んじ
て、元と通り儒者に任命した。

迅雷隊に對しても、之れを存續させ、改めて地役人岩間政
醇を隊長とし、相川近郊の開墾に従事させた。其上にも先き
に迅雷隊の計畫を越後府に内通した、一浪人と村醫とが、奉
行所の獄に囚はれて居たのを、引出して處刑して終つた。

一方北辰隊では、最初迅雷隊なきが多少の反抗をするもの
と警戒して居たものが、來てみるとそんな風もなく、反つて
島民の待遇が甚だ丁寧なので聊か張合ねけの氣味であつたと

退藏は前原より、西園寺様の額、退藏於密の書並名とも
被讓候、笠氏の名と暗合云々

と添へ書きしてある。退藏於密は、易經の聖人以「此洗
心、退藏于密」より取りしもの、只「笠氏の名と暗合」とあ
るのが解し兼ねて居る。養祖父は北辰隊の小隊司令であつた
が、佐渡へは行かなかつた。

一、奥平謙輔人肉を食ふ

曾て何かで見た記事に、明治三十八年十月北魚沼郡の山奥
にて、炭焼小屋の附近に、多くの人骨が発見され、それによ
つてその炭焼男が、人肉を喰ふ常習者なることが解つたこと
を讀むだが、奥平謙輔にも、人肉を喰つた話がある。彼は
蝮蛇を常食のやうに焼いて食つてゐたと云はれるが、一日隊
士を集めて酒を飲む時、

「試しに人肉を食つてみよう、
と云ひ出し、

「今日は刑場に梟首がある筈だから誰か行つて取つて來い」
と、云つて左右を見廻したがさすがに隊士連も顔見合せて
直ぐには起つものは無かつた。長井光憲(佐渡人)といふ男が

「私が行つて來ませう、御馬をお借し下さい」

と、云つて闇夜の然かも雨のそぼ降る中を、河原田の政廳
より二里ばかり隔てた栗之江村の刑場まで、馬を飛ばして行
つてみると、果して梟首があつたので、其頬肉を剥ぎ取り、
用意の竹の皮に包んで馳せ歸つたのは、夜明近くであつた。

翌日謙輔は改めて酒席を設け、醫師玄洋を喚び出して、
「さうだ人肉を食つても障るまいな」、

とさくと、玄洋は、

「いやちつとばかりは構ひませんが、澤山はいけません、
と云ふので、粒々に細かく切つて煮た奴を先づ自分から先
きに食ひ、嫌そうな顔するものには強めて食はせた。森と云
ふ隊士の一人が、長く勞症に悩むてゐると聞き、わざ／＼其
肉を鹽漬にして贈つて食はせたら、病氣は間もなく治癒した
とも云はれて居る。

人肉か何かの病氣にさくこの迷信は、古くから有るらしい
魚沼の炭焼男もそうした迷信に囚はれてゐたものかも知れな
い。私の少年時代の悪友が、誤つて刃物で指尖の肉を削ぎ落
した時、捨てるのが惜しい氣がして嚙むてみたら、とても酸
っぱいものであつたと話した男があつた。

〇一時の流行であるや、物しは言葉やモロツク言葉など、
他日利度解群がつかぬ、多冷北著の言葉の或る範圍を
限らざるし、このから其影響は多岐にわたるが、
うぬ、大伴都賀の限らざるし、
流行しはたまなるお生此方の限らざるし、
仕舞つてある。ノルス(北)カウス(南)が北は南品の隠微は
はた、不見(目撃)やアラシ子んが誰んも、
一々、維来をあると、その日の秋雅も、
も其つて、
今七口伝ひあるし、
いれと、
身体、
身休、

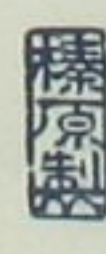
藤原

トトルと、
ふふ、
W.C.の便所の約法、
ニ、
カイ、
勿論、
楽と、
是と、
ふ、
ふ、
ふ、
最大、
冠、
特

越の字と冠らざることを流行せしむる。質屋とあるとあるを
忌んむ七つをたまにのりきりて、今一六路りの行儀があ
る一と六と合すんか七とあるから。其狀を飛らすとある
よの可減るを後を養ふことだが、今の世大リストの儀も
行はれぬ。賄儀代いつの世も書生問を行はれぬ。今いん
と大トリム(低氣整)と云ふをみる。ヌーボー式ニエホン三義
と云ふ指と右いんを志すが、今七葉と多流きをみる。ねき猫の
即座を考ふる神棚とあるは、今人の人間のマ子ウヤンがデ
パイトを用ひぬ。勿論の法を簡約とモテと云ふことある。
カワレツを物とレカツと云ふが、後世より解く。五枚目から
雪を白魔と云ふ山の経路と達しれを山の征服と云ふ。新らし
い行動と尖端を行くと云ふ。理解の足らざるのを認識不足と

去いぬの甚しいのをノールスと云ふ。今人の能為自守と云ふ新義
である。自動車をタクリートと云ふ所からテクリートの新語があ
る。テクリートは、藤栗毛と云ふことを云ふ。昔は、いんを考へ人々ある
の、行儀上スアンフレーションを物とインフレと云ふ大恐慌の
あるは、物柄を物柄のハツナトリムを教く。郊外も遠く
ハイキングやドライブがある。朝昼店に定食が行はれ、共同
生活もスアパイトがある。エレウエイトとエレウエイトと云
ふがある。ダンスホールがある。聞かぬ。たると、女の一端が
ある。一時高等の字と濫用されることがある。高等内侍と云
ふは、私娼の事と云ふ。たあるも、多く高等を宿と云ふ。た
よんは、宿の事。可笑しきことと云ふ。こんを遊んで、後と宿不著心
方いと云ふ。たよんが、實際だと悪口と云ふ。たよんは、たよん

つは。高等市民と云ふ所へ行へんは今の有閑マダムが通用し
てゐる。セントルメンをセトリつてセントルメンと云ふものも可なり
こといふ行へてゐる。其まゝを名にし錢儲けをせよ族をさすのいふ
は、トランプが餘り流行して支那の麻布が流行し、在友に弄産合は
其他いろいろ此社人の用紙があるが、他日感ふべきもの。ハイカラと云ふ
と襟の高いうから出た言葉であるが、進々洋風も洋風も義
を授け、洋装をハイカラに読ぶと云ふは、洋風も心符するもの
をハイカラと云ふものだが、出たの漸やく、残りも味がある。
フアンヤムスターが映画方面で流行し、出してゐる。フアンは
愛好者抱き着るものだが、今のものは愛好者も書道の愛好
者も用ゐるもの。スターは俳優の口出しを云ふ
ものだが、今のスターは冷も用ゐるもの。やうに云ふは、貴族の標



がエロロ、ペリンと云ふものが始まるが、今のレツト、ペリン、赤福が恐
らくとある。邦人の赤化して入牢するものがある。但し入牢中
轉向するもの。深入りのもある。恰も赤装の外皮は、赤く
芯が白くやうするもの。一般に深入りのものは、芯まじり赤い。此の
連中の注意人物は、ブラワク、リス、ト、我々録してゐる。危
険人物だ。共同戦線、主のとある。いふ、いふ語だが、こんな危
険の口で、四路も主を用いてゐる。●麻工の口で、主種の作戦
かゝる。他食を行つて人を困らせる。●又、口で、麻工と云ふものもある。同
界外のもが、聲援をせよ。主の作戦である。英法、ウ、グ、ア
（主）と云ふことば止む。獨逸、ペリンと云ふものもある。根性の
喫茶店も、佛法、モン、ア、（主）と云ふことば讀ませ
る。タクレーは初の便、一回か、口の、田々りの称が起つた。其

の女がモデルと云うものがある。吾等の書生時代のミルソホール
があれ。まあ全くのミルソのみの店だ。新書開巻を扱ぬ書屋
だ。よほどか、今ハカロー、ハウスがあれ、フルーツ、ハロルがあれ、カントリー、ス
トアがあれ、アイスクリーム、その他種々の飲料の店があつた。四
五十年前、較べると、おれも豪華な世の中と云つた。ビルは丸
ビルも、始のころ、大連、東京を扱すのむ、ビルディングを略して
ビルと云ふのは、此の約語也。他日、人と感ずるある。テ
レウ井、レモンは字といふと、電送するも、昔し、無のこゝろである。
亦、レ、ス、ドラマ、セラ、レ、ス、カ、行、な、て、か、エ、風、さん、れ、口、歌
劇、である。高、清、い、ろ、く、の、新、演、が、あ、る、か、一、々、奉、け、る、こ、と、が
煩、り、い、か、く、思、ひ、出、一、端、を、奉、け、る、こ、と、だ。



〇友人の句集と讀み二三を拵ぬす

白梅や賤の軒端のこほん程 井月
山ハまゝの床の子まじらや梅の花
梅の香やもせろく 振也 柳丸ははら
陽炎の動かす花の若年まじらふ
降るとまじ人又い見せて花の雲
魚影のたましく見えおぼほむ
初念のぬ心を頼む梅木うふ
蔓どのついでこの年か 高士の山 一茶
お座を又と来た顔の小野 丈草
ふじの雨氣にはかゝり着る
あ風石の下やあゆ子の身身の終り

秋海棠西瓜の名に咲けり
山門を出ん日本を茶桶歌 菊会
都す又も北斗にいづく結成

○隠岐の島にあり候後かあるとぞうれ。此の島の承久年間
天皇御遷座の悲愴の歴史かある所は後醍醐天皇の
てあるれは北島から朝廷へ貢物を献じられたるが海軍の
意は舟が覆没した。此の事か天徳と連し斯の島から
貢物をせしむることの氣取のまじと仰せられたるが免稅と
するれことも島民が喜ば謝恩を表する意味か貢す
べき品の交付を焼き其の烟を東部の方面へ煽り
麻かせり貢す換りといふあるが、おもしろい傳説である。

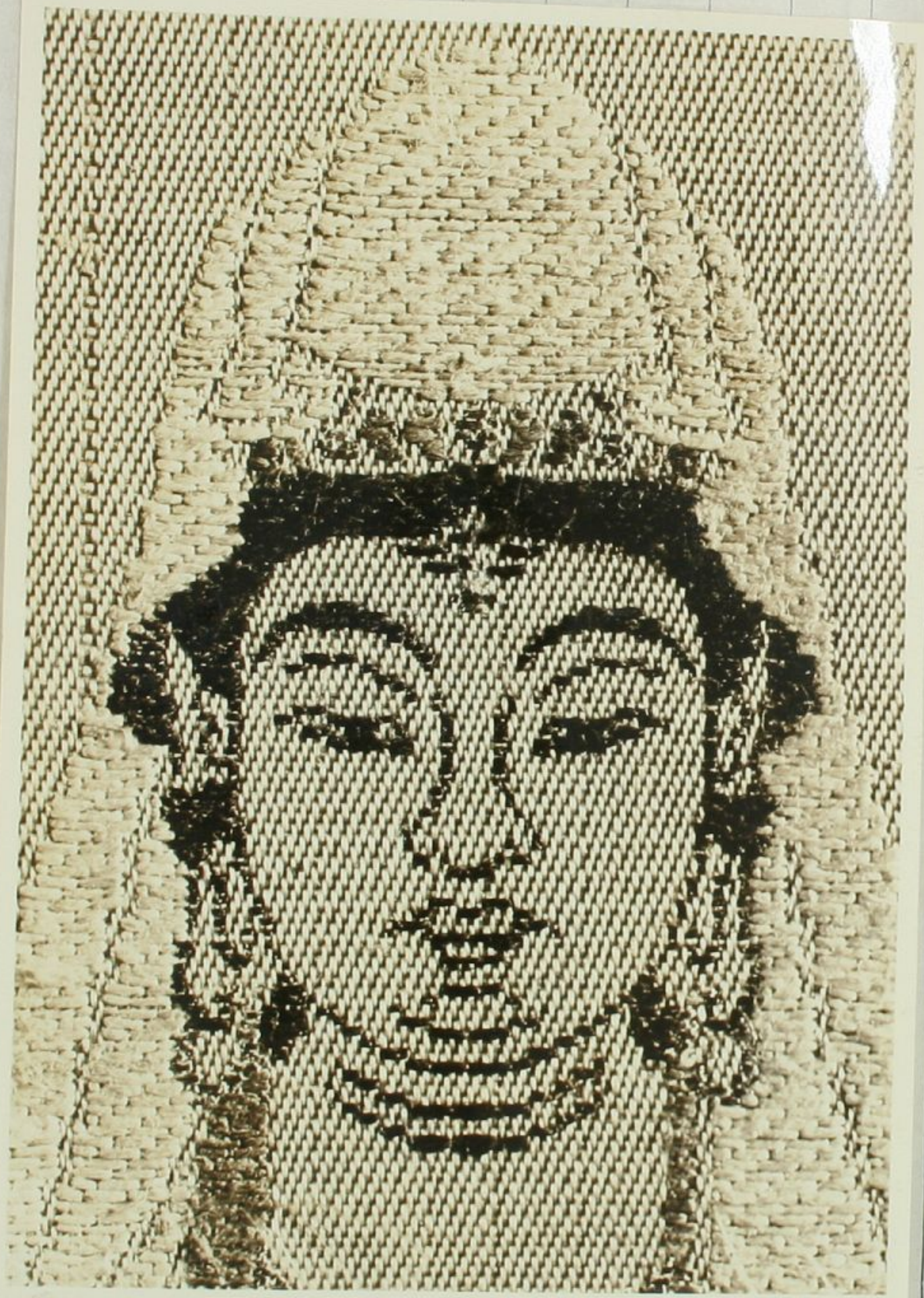


○御田の村の村の二重村を現に完破されり候に
市井を計画しりある中に社の屋上に照空燈塔
を置ること其の計畫の一なり此の燈塔の費用は一萬五
千圓を要するなり或る成金が資金を寄附しり候に
んだけ既に成つたと云ふ但しこの其筋の認可を得るに
んは運送か出来ぬなり認可を得るに取んれと云ふ此の燈
塔の防空の物なり也認可を得るに取んれと云ふ此の燈
塔は不慮の事なり無の譯は各デパートが競合的
に此の燈塔を建設し認可を得るに取んれと云ふ此の燈
塔は之れを必要とするに港の所在を知らず考へぬ
内燈があるか否か軍用上必要あり候に此の燈塔
の所は戦時某地へ充てらるべし其の條件の認可か

あり澤地何れとて新築社とてい誠、松南の計畫は
 皇親御子の夜をまじりて、工りヨミ子ノレコト
 無の意也。此の依つて好む時状が既らさるに
 自分の嘗て東京の法政學社より建業とて、此の
 父社らしいものと自問自答し、未、東京朝日の屋上
 本社休書坊の合会のものを見、東京朝日と云ふ
 法政學社と云ふは、此の法政學社と云ふは、
 一ツのこと鳩余を没せしむるより更に一層有る
 香義はありと感した。

○大隈家の慈母曼陀羅の事、前々報じられた大隈氏から
 四倍大に拡大し、今より五倍の大きさになったこと、
 かねの法政學社から十年もの経つ、今一回四十二寺と納

標記



ゆえに、この漱石寺、御のこし、字に、終の太く
てくるふ、縁起である。
三月廿四日記

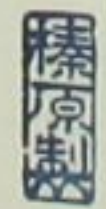
○安田権国八段し、稀む、後、今合の、核、を、と、つ、れ
が、昨、夜、(廿四)辰、好、軒、(ち、山、南、町、五、丁、目)、こ、ろ、を、聞、い、れ、
と、打、伊、左、川、瀬、山、木、村、今、交、伝、出、度、が、一、又、後、二、具
を、も、つ、れ、此、家、の、小、祝、候、の、店、心、が、割、直、の、所、者、が、自、分、七、破
粒、の、飽、合、し、れ、上、川、瀬、が、寄、居、り、就、し、書、い、れ、左、右、を、枝
露、一、批、証、を、ゆ、ふ、れ、か、り、予、ハ、ラ、枝、鏡、を、入、り、行、り、の、助、言
を、う、し、一、席、上、一、時、派、つ、れ、此、又、心、三、回、打、が、指、の、帯、し、れ、四、五、冊
の、者、あり、内、挿、抄、ひ、ひ、の、横、と、本、が、指、の、規、矩、と、ま、
か、あ、つ、れ、あ、ら、あ、る、梅、の、寸、法、が、録、え、ん、と、あ、る、行、り、及、ん、か、あ、る、
行、り、も、あ、る、行、り、敷、か、多、く、寸、目、法、の、ま、瑞、ひ、あ、る、の、れ、あ、



ろ、い、れ、他、の、一、書、ハ、種、々、の、よ、を、ハ、卦、の、算、木、と、見、て、回、し、ま、ん、こ
狂、文、を、お、れ、れ、い、ふ、の、ん、キ、時、代、の、我、出、が、あ、る、扇、火、着、算、
羽、織、の、但、筆、等、の、尺、寸、の、細、い、尺、寸、種、算、木、型、と、
上、下、六、本、つ、き、あ、り、回、し、れ、い、か、あ、る、か、う、し、り、又、ま、じ、の、巧
み、あ、る、と、い、ふ、あ、つ、れ、こ、ん、が、擬、ら、い、と、當、世、風、の、と、い、か、又、ま、じ、を、や
つ、し、れ、れ、と、一、真、び、あ、ら、う、と、い、ふ、と、い、い、笑、つ、れ、さ、と、あ、る、母、の、物、あ
り、算、木、を、見、ま、す、と、い、ふ、へ、き、ま、あ、る、と、い、ふ、と、い、か、あ、る、か、
年、筆、ナイフ、フォルク、シガレット、ホルダー、ペーパー、カッター、
ペン、の、磨、粉、枝、鉛、筆、ス、プ、リン、ストロ、ク、テ、ウ、ブ、但、付、腕、時、計、洋
雙、の、并、音、楽、の、指、揮、棒、カ、ラ、ー、海、軍、短、剣、ピ、ン、セ、ット、注、射、器、
西洋、輝、煌、時、計、の、鎖、験、温、器、靴、紐、靴、へ、テ、懐、中、電、燈、ブ
ラ、ッ、シ、洋、装、女、帽、の、留、針、鷲、の、ペン、化、装、の、試、験、洋、小、鏡、洋、畫、の、刷、
鼻、眼、鏡、(肩、章)、毛、毳、の、編、織

種々取調へくんと、後果曰西陣伊達も家も
制らぬと云ふ事判りぬ。即ち此言候事
伊達強助氏にて四十二件作らん候傳り一休二四
廿五入りの事候。

大師像の方々十数年後伊達と虎一家より九十
体作らん内一休の大隈家一休と自宅の死念の
為保夜と云ふ事家々主人死去目下廢業
即ち存らん候事伊達強助家の遺傳候
を少くも時の志願云油へ就て後果手紙一
通と書付一通借用御冬より二通と存候
口傳候。尚大師像の方々「伊達」家と残り候一
軸の如何等記候事無之。為大師像と云ふ蓋



此書裏の字より撮影印 是亦の老
二端より一と

後果

昭和十二年三月廿四日 下村白太郎

中島先生

此書に撮る此の程、川崎家より伊達家
へあること判り、伊達家氏が其の後のことを
記し、今分りぬ。尚大師の像、別に二通と存候
こと今分りぬ。志願し、遺傳者等此より、雲上寺に
あり三幅對の事、伊達家より由り、無冷命一伊達の

休・たも(ら)ひかへし二(る)ふ(こ)心(つ)に大(師)傳(の)上(頭)と大(師)傳(の)
の心(を)と撰(り)て撰(出)し(と)あ(る)撰(者)の(名)は「沙(門)大(海)後(末)
撰(撰)」とあ(る)幅(の)下(部)右(端)に(左)の(又)字(が)見(え)る

明治廿六年二月用蓮慈堂西陣伊左

八十八歳大隈三井子

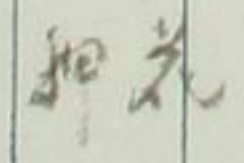
此大(師)傳(の)筆(の)書(は)左(の)識(は)あ(る)

伯(奇)大(隈)重(信)君(母)三(子)自(夙)に大(批)會(能)を(究)し
其(稿)末(を)以(て)高(吟)大(師)の(尊)信(を)知(覺)し(四)四(十)
八(ヶ)所(の)靈(場)に(納)め(ん)こと(を)期(し)表(す)存(念)を(ぬ)
捨(す)ること(に)あ(る)年(遂)に(の)況(廿)六(年)と(あ)り
染(糶)金(く)油(み)く(と)を(得)て(制)衣(儀)を(伊)左(と)席(席)
一(式)に(附)托(せ)し(る)氏(ハ)无(斯)道(の)堪(能)く(上)也(公)



の(修)信(に)感(奮)高(し)報(の)之(を)深(し)精(進)深(る)大(師)
の(冥)助(と)祈(り)勤(勉)有(り)其(工)を(了)る(と)得(る)を
吟(吟)母(公)終(世)の(大)報(此)に(今)成(る)を(必)く(欲)夫
憶(め)り(き)し(大)了(る)存(念)尚(も)干(と)念(を)忘(れ)
之(を)と(と)あ(る)更(に)二(枚)を(刺)し(加)め(る)に(大)師(真)
筆(の)般(表)心(を)以(て)一(を)再(公)に(撰)し(一)を
自家(に)留(め)以(て)紀念(と)為(す)伊(左)氏(余)と(道)
交(り)来(り)て(顛)末(を)書(し)し(と)

荻野の精研



此の書は、日本の歴史を、その政治、経済、文化、宗教の各方面から、詳しく記述したものである。その内容が、非常に興味深いものである。特に、その政治の発展、経済の隆盛、文化の繁栄、宗教の興隆が、よく記述されている。この書は、日本の歴史を知る上で、非常に重要な資料である。



大徳 大徳二十

曼陀羅研究は、大徳一師協士と今も記すもの
 大徳の何人の問題に、協士のその位をかち得れりやを
 少くと蓮の實が或百年一も生きてあることよ、そのこ
 とを研究して五福一の協士をかち得れり自由

大徳二十

しゆては、其の歴史を修るんが、その委曲、他のも
 くことよ、その協士が、大徳の協士を修るんが、その委曲、他のも
 植物名の協士、西洋の協士、大徳の協士を修るんが、その委曲、他のも
 り、その協士、大徳の協士を修るんが、その委曲、他のも
 こ四級の協士の協士を修るんが、その委曲、他のも
 開店に得れりや、その協士を修るんが、その委曲、他のも
 現に生きてあることよ、その協士を修るんが、その委曲、他のも
 である。植物名の協士、西洋の協士、大徳の協士を修るんが、その委曲、他のも
 位を得れりや、その協士を修るんが、その委曲、他のも
 である。協士、西洋の協士、大徳の協士を修るんが、その委曲、他のも
 入納り、その協士を修るんが、その委曲、他のも

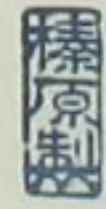
○昨廿六日早大出身後久北振え東台池上瑞波の家
 今更、そ後振え、在りぬ、其田大隈も余、冬側七八名出
 席、後、約三十四名各、皆五十年前の舊知、下も、今分す
 一の概分り、一列、以、未、初、め、を、過、ふ、よ、か、か、大、概、盛
 六十、出入、皆、元、氣、旺、盛、る、中、二、二
 十名、代、り、起、つ、て、早、稲、田、の、授、歌、を、唱、ふ、よ、あ、ま、う、同、心、す
 一、七、年、遠、の、福、と、氣、き、よ、あ、と、い、え、多、今、の、衆、演、説、の、戒
 席、を、あ、ま、う、校、友、六、十、名、を、越、く、民、政、堂、と、廣、く、い、ふ、の
 智、多、く、政、友、其、他、に、属、す、よ、あ、と、い、え、今、の、多、く
 各、各、の、飲、酒、多、酒、間、談、笑、四、回、兩、を、往、り、止、り、る、と、い、ふ
 愉、快、を、受、け、け、り、此、人、等、の、身、企、人、と、い、ふ、お、待、杖、と、い、ふ、名
 一、等、の、方、の、二、十、代、り、も、書、に、者、外、に、出、席、し、た、よ、あ、七

標原製

八名、其、の、名、左、の、如、し

- | | | |
|-----------|-------|----------|
| 伊豆市人 | 瓜見三幸 | 横川重次 |
| 田川丈太郎 | 田中万造 | 紫野あけ丸 |
| 鶴沼守人 | 内ヶ崎作三 | 増田義一 |
| 小山松壽 | 小山谷花 | 安部西純 |
| 浅沼福次 | 市島隆夫 | 休保畢雄 |
| 根井兵衛 | 由谷義治 | 西田鏡三 |
| 森 肇 | 船川啓四 | 以上、身、企、人 |
| 他、の、未、知、者 | | |
| 頼母木桂吉 | 松村福三 | 佐々木啓 |
| 松木 弘 | 佐々木其一 | 等 |

○自らの洋画家川村清雄の心を号するもの。その交
 りのあり、早稲田の貴定家と掛けあふ、其の代りの代り、
 千代の巨額、自らが書かせたもの、その代りの代り、
 随筆の考いれから書説し、その代りの代り、その代り、
 今更の時より、その代りの代り、その代り、その代り、
 恐らく此の顔面が清雄一代の苦心である、と自ら
 信じてゐる。偶々本家久雄の随筆、おの随筆の世
 界を改めて見ると、やはり清雄の画を記して、その代りの
 代り、勝伯所為の龍の苦心が一代の苦心にあらうとま
 する。その代り、勝伯の清雄の苦心が代りの苦心にあらうとま
 の素を揮つたもの、其の描写の時用いたモデルが如何なる
 気概がある、又又、云々



橋中才一の大作り勝伯家所為の龍七、狩り流の
 龍の山の上のつら別れの趣がある。その唾玉集ん
 ぶると、尻のまの血がけの馬の首を探してまた、美
 を皮剥いて龍の頭のもぞんとする、龍の角やテ
 コボコのあるところのさいえをモデルとする、龍
 の身体は洋山の蛇を集めさせた、その代りの代り、
 龍の身をテんぐ、描いたもの、因像のその代り、
 作で浪や雲をまき起して、雄大な家柱の趣
 が画面に横溢してあふ、この意を、その代りの代り、
 作る

自らの勝伯所為の大意を見れば、その代り、その代り、
 人々も得まへ

一自今より支那の進歩と海人の時あはく琉球の島の骨董
 産を採るルリヤンと云ふ其の由未を知らざる
 比が、この康熙の朝、カラス島を製成せしむるに
 か、遊の竹の名をうけたらと此の如く支那の支那
 製成の玉島の模造が七と、恰も青磁を玉島の
 代用せしむると同じやうに精巧を去るて筆ふるを力
 めれば果ては奇産を産む、西洋人も其に教つる
 いて切瑛自國産を力と注いでと云ふんもある。支那
 がうすをわざとせしむるは、六朝時代からある。支那
 一西洋人が日本の進歩を先に見初め、ハ里と白と
 黒の出来をあることとある。

漢字

婦人学 婦人学



人工受胎は

かうして受ける

一アメリカでの受胎規約

(最) 近アメリカで人口受胎法といふのが唱えられて
 います。これは夫婦のいづれか
 缺陷があつた場合、思ひ通り子供
 が出来る方法で、もちろん双方に
 あれば最良です。
 その缺陷が女性の種々の病氣に
 因る時は、これを治療しただけで
 容易に受胎するのですが、かう

(併) し缺陷が男性にあつて
 たとせば夫が無精子だ
 といふことになる、この方法は
 道徳上及び法律上の種々の難關に
 遭遇するでせう。それは精子を第
 三者の他人から採らなければなら
 ないからで、責任ある醫師の手に
 よつて血統の正しい精子を選ばね
 ばなりません。
 (令) は主として後者に就て
 簡単に説明することと

しますが、先づ夫婦と醫師とは嚴
 正な契約書を交すのです。これは
 アメリカでは法律上認められてあ
 り、生れた子供は精子となりませ
 う。精子を供給する第三者は花柳病
 、梅毒等の系統でないこと、施
 術を受ける女性の相手の夫に體格
 、容貌、性格の似てゐることが必
 要で、血液型が同一なら理想的で
 す。且つ必ず夫婦と無關係の他人
 であり、姓名はもちろん何事もそ
 の夫婦の特に妻に知られてけな
 りません。また、妻も第三者に身分
 その他を知られてはなりません。
 これが最も肝要な條件です。

(女) 性は精神的に自分の子
 供の實父に愛情の移つ
 てゆくものですから、精子の供給
 者として夫の兄弟等の親戚は絕對
 にいけません。これは施術の際に
 秘密として置いて後ち顯はれる
 ことが多いからで、夫の兄弟の精
 子が醫師により秘密に使用される
 如きは道徳上も決して許されな
 いです。
 (天野文子
 天野文子女史は米國エール大
 學醫學士、コロンビア大學文學
 士で、エヴァンゼリスト醫科大
 學講師及びロサンゼルス市母性
 相談所診療室を勤め、最近歸朝
 されました)

ハ里と白い色の内、かくて長くある、日本、ハ里と
 白色の内、かくて長くある、洋人の最初、世に
 見え、ブライリとホワイトが巧み、彩色もとうとう
 のにビックリした、後、ハ里と白と黒とある、
 の、更なる、なる。

身の内全に病臥中、病室に居るに、見よ、未だ、何か書
いやらうと、思ふから、病室に、掛けた、置いた、首に、容
華の十六夜、羅漢山中、遊樂の、園を、臨して、書きた、い
と、歎ん、ら、二三日、経つと、路つと、き、え、ん、の、存心、の
り、も、違、な、ら、う、と、玉、束、に、か、あ、ま、思、ふ、人、の、故、人、の、素
養、が、あ、る、か、ら、も、あ、つ、た、ら、う、な、つ、い、た。

一 孝業が實之時代といはれ百人一首の人物傳が故、
まづこの、えん、の、ゆ、法、時、代、以、後、の、名、傳、の、方、傳、の、あ
つ、た、ど、の、人、物、や、う、く、似、て、あ、る、或、は、字、ま、い、入、振、つ、れ、よ
か、も、知、ん、ら、う、の、如、似、顔、を、書、く、も、浮、世、俗、の、を、座
ま、う、程、の、投、筆、を、有、し、只、の、人、物、の、品、位、を、描、す、點、の
浮、世、俗、の、利、意、及、び、う、い、自、合、の、と、珍、本、と、い



今も残してゐる。

一 日本畫や、ま、い、の、線、が、あ、る、外、國、の、繪、の、繪、の、真、心、塗
り、淡、す、か、ら、線、の、た、着、し、ま、い、の、日、本、の、線、の、強、弱、を
画、に、死、し、う、流、き、な、う、ま、い、と、ま、い、の、白、描、の
繪、と、う、く、と、線、が、い、ん、と、露、出、す、か、ら、線、の、吟、味、が
所、望、の、あ、る。日、本、の、白、描、の、畫、が、行、の、人、出、し、た、海、に、何
人、も、あ、る、か、い、ん、と、ま、い、の、い、ん、の、山、木、互、彦、の
説、は、振、つ、と、室、阿、と、傳、教、の、支、那、の、新、宗、教、を、日、本
の、持、来、し、た、時、節、を、ま、い、種、々、寫、す、と、ま、い、の、か、あ、つ、と、
一、々、形、も、ま、い、と、ま、い、の、白、描、の、皆、白、描、の、日、本
の、持、来、し、た、ま、い、と、ま、い、の、寺、や、傍、の、白、描、の、寫
し、傳、く、れ、現、在、の、ま、い、の、本、で、寫、原、時、代、と、ま、い、の、

この画像が佛像のありの回像とも自描の畫であることと
始めに云ふ^〇あかぬきとも宗教的の回畫がその源
因ともして存するものなる。

一 北畠治房の豆腐屋の枱が後法隆寺の寺持の枱を
買つて平玉武夫と云ふ北畠の系圖を採られたか
道に北畠親房のあはれと云ひ出し、北畠治房
と稱し、北畠の源を尊ぶが如くすべし。

一 佛像の製作年代や當地を其の材料に於て木に於て
とが鑑定の一法を相違するの如く、我邦に於て此の如くや
のト林を採るが北畠に法を採るやあまうられ
亦るに江法政忠と云ふ人より此の風を鑑定家
に北畠の源を尊ぶといふ北人の説を「天平以後

推古朝の木像、重く天平の如く、輕い。前者は
樟が材料か、後者は松が用ひえり相違はこ
んであるを時代をとらざるに於て、^楠出果ると云ふ楠
は日本固有の材であるから、樟材があるに日本製
であることが知れるのである。樟、古書に櫛樟とあ
るが樟のことである。佛像の内、其の形式が百濟
佛に似てあるから、百濟佛といふのであつたかある
が、是れ樟が材料のありの所から見れば、又佛の
本を造るべきに於て、楠、白檀の如く香氣が
あるから、之を材料に選んたかあかぬきといふ。
一 日本製の涅槃の多い圓の古畫を保存すること
甚だあかぬき、程長と長の銘を以て、いざ使用す

小高く甚に陰鬱である。伊大利の外氣の只願ひ
 ありんか窓も多し開き快調であるから日本も
 通す。極南者が美福の北から、日本も
 ありんか多い。亜米加式の四市務の一方の建
 築は飾り感心が出来た。

一 近頃、何れも七層用本位となりて建の築物も層根
 のまの箱のやうなものが多くなり、とんとロリ層根
 となりてゐる。日本建築の中心も、宮寺も層根の構
 造であり、層根が二重三重の重なり、大小の層
 根が錯綜して美観を呈し、まろく複雑であ
 り、これら丸部から出て風流あるやうな
 一と一の間、其の美観を得る。内部の構造



と様性よりしてゐる。或、中二階を仕つて、或、ある
 を法つたり。高くする。層根を築いて、
 ハ、背の糸の山あり、
 て段段をさうして、
 所がある。城の天主閣の層根の複雑なるを見
 ても、日本建築の特色が、西洋人が日本建
 築を特に注意を拂ふ中心點が層根である。

一 今の兵器の病ひは、
 され、
 ず、
 犯すことを許さぬ。

稀れいある。墨の程の方が重んじらるゝ之んを予
又入るゝとも難い。

一 四方端生の著し墨海の玄精は宋比玉
の言葉にある。墨を墨頌として塵巻と
するは是の。曰く、書牒中、凡、淨榻、秋、可
らざるもの香を、沈み香と燃す、花香をすく
く、花の香、花香をすくく、花の香を聴く、花の香
若香を聴く、墨香を聴く、若かす、墨香は
蘭よりく、麝香よりく、色に非ず、味も非
ず、鼻に從ひ目、涙の故に、視るも、思ふも、人
墨の香を視ると、思ふも、墨を漬く心して
又云く、筆先より、墨の退き、紙敷く心始に



一 反し、硯毀らん、凡、硯を愛す、唯、墨の残、珪、粉、
璧と云ふ、筆の、愛し、且、三、お、同、く、思、ふ
此、神、あり、形、留、ま、る、墨、の、有、を、出、せ、無、い、入、り、聲、
真、雙、の、混、ぶ、る、墨、の、蓋、墨、の、然、仙、も、為、す、心、
久、く、視、用、あ、ら、ぬ、戸、解、す、と

一 日本、多く、の、名、筆、を、得、り、墨、の、市、河、未、庵、の、文、
若、二、百、筆、譜、が、ある。名、墨、を、花、の、如、く、を、淺、會、
梅、香、とも、梅、香、を、花、墨、影、梅、梅、の、若、か、る、今、
美、術、者、採、り、在、り、と、云、ふ、梅、香、の、程、方、の、名、墨、を、
多く、花、の、香、外、羅、小、筆、の、二、筋、の、墨、を、花、の、丸、
も、之、を、後、り、し、り、墨、の、重、墨、あり、と、云、ふ、金、
と、價、を、同、く、す、と、云、ふ、如、墨、銀、の、九、錫、香、の、如、く、

一 蓬苑はユマシテツノの業を成し、高橋彦舟
 湖とよみ家びも。これ熊本高士の空男坊の切
 少と画と好大珠に美人を画する、執事して
 の比折柄、七と去原、若奴と云われ、今禁が芝居
 の世傳と云うて、徳本やのてきれ。此の表の次男
 信の毎日芝居に出かけ、此の美人を写生し、
 其家ひい芝居に往くことを、執事此の行為
 が今此の知の所と云う、彼女自身此少年の父
 母を信めて、切に画を教へて、本画画家と云うる
 と勸告し、此の父も今禁の言に従ひ、其子
 を托した。今禁の此子を、本橋湖の門に入れ
 彼、自分の美の才として、高橋姓を名乗ら

蓬苑

せり。いつをやの美術、所は、今、北原湖が画を出
 品した時、搬入の時期が二三日後、此の、或る後
 接者の、斡旋の、個展を催さしめ、此の、ある未
 歴の、ある、家、此の、堅人、親客が、ある、と云

一 日本の俗世の、最古、古い、の、過去、現在、因果、経

がある、この、上、舞、の、給、解、がある、下、舞、の、詞

がある、が、特徴、である、既、煙、から、出、れ、よ、い、中

二、此、凡、の、経、が、あ、つ、た、多、分、支、那、の、原、本、を、日、本、が

写、し、た、の、よ、う、い、い、此、経、も、武、行、の、如、く、あ、る、と、云

木の、逸、筆、を、標、と、し、三、通、り、あ、る、と、方、い、て、み、る

才、一、種、の、こ、ん、中、を、醜、態、報、恩、院、上、品、畫、の

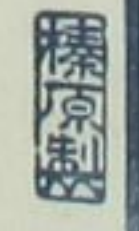
其書ありきと云ふ。と近年見たり。其書の内容は千二
ゆいし第一巻の残缺十枚、第二巻の美術学校
所為の文、第三巻の山崎位物から出て墨田
男の手紙入り。其年代は略々同じである。
一 紛争物の俗名を現も種々変化して終つて大井
板まじ屋内のちりちり光景が又くやうな二巻
まじやつた。よん世界の何んもやうな二巻の書
日本特約である。

〇以上の如き開業を素としてゐる。政府は突如議会の解
散を奏請して即ち立憲解散を断りし。實は天の
御座があらた。三月三十一日議会の六の閣内長と
これ最後の日はあつた。従来解散に至らざるは政府の



抗争する時に行ふか或人と例とをみる。と云ふ。と
んとの異つて、衆議院の未嘗有る大の懸る亦る協賛
を遂てしめ。三大政黨の全く無氣力が、始終抗争を
避け三つは無言閉会を免れし。然る亦る再議を
通過すると、思想の齟齬を行つた。悪口を云ふよ
ハ政府の行動の喰ひ込けれと皮肉のしめ。首相の解
散の理由として考へる。所は極端に、衆議院の審議の減
少を缺くと云ふ。甚に空疎な申合ひある。遂に奉
法其他重要法案の審議が平河取り政府の善満れら
つた。ゆゑに政府も甚に無地をやつては、此の激
合の今期申入政変が起つて宇垣が流産するまじ。此の
の時日を費して内閣内閣の成立するまじ。幾日の今期

を喰ひて居るのみ政府の一向厭棄を祈るべき如く、
憲法案を提出したことも、**無**理な仕打と云へても得る
い。林首相の但書の言初和を**書**きふと●**誓**ひぬ
敢て争はざる衆議院を改革せよと成りては、
と事王如く、**日**和を貴ぶの宣言を反故と**し**、
を逆説するの**大**手を出さるゝ何故か、
意を解するに出来ぬ。或云く、**度**の返り書
解散の意あり、**さ**もを考へて、
ら、**其**際陸海軍の統一は宿案を今方実行したる
きまふと、或はともかくも、**思**ふに、
の取巻を定まると、**思**ふに、
行動も、**思**ふに、
國民を御得也



一、解散の理由を宣明せねばならぬ。
二、**憲**法案の提出は、**果**して政府の何を期す
の、**あ**らうか、政府の味方と政黨をせよと
の解散は不満か、**二**大政黨は、**多**分提議して、
場を立つて、**あ**らうか、**其**の**法**案の政府に利ありと
とい略を恐れたる、**其**の**法**案が、**解**散を言
するに、**其**の**法**案が、**解**散を言
つて、**其**の**法**案が、**解**散を言

四月一日記

○大隈家の秘書、**其**の**法**案が、**解**散を言
下村から、**其**の**法**案が、**解**散を言
決心せよと、**其**の**法**案が、**解**散を言
衆議院を、**其**の**法**案が、**解**散を言

善美も多し。苗裔を正すもの心得りありしとき、幕末の
政綱を善くして、西洋の地に掠奪の卷をとりて、北地が試む人し
これ時、結社の身と捉と、救済の衝を當り、官廳を交
渉し、留て救済米を得たり。此の財金を募り、これ僅ら
又西洋を助けたり。西洋の産業を進展するに就して
種々の功績あり、此の年外、國を遊んで、視察を遂
げ、海外輸出の復興に就して七行の改革案を所成あり、
才三四回、四の勅諭を降する、この案を官に任せ、帝
室技を改良、軍物と補給の検査掛をも拜命し、大
正十三年、陛下(東宮御代)御婚儀の時、五位の賜位
を力受けたり。北人の洋行の奨励、このありし時、此
の南洋に施行し、西洋の復興機械を懐い物くり、之を

武揚

を天授の供したることもあり、西洋の洋式機械を用ひ、
その功ありし北人の功あり。北人の天授機械の友、強固物
を強出すことも、これこれ、綿珍織子を改良し、北地
人の功あり、此の九年、二十四年、此の要領大賞、此の
結末にありし、此の功あり。

○根本武揚が、西國の公使たりし時の狂詩を、入洋連文
からり、此の狂詩として、上乘のものと云ふ。

高情巍然勅任有、威望恰作大右親、
屬名陸士士、人並欲有英佛、
天恩渥、五年在勤、
千兩飛道、全權が使節。

武揚の子金八と云ふは、柳橋の娘の口名のある心

おうしく思ふにこそあるが、根本ハ金次郎とこそあれ、
金八と金字を刻いたの比と知んた。

○中山憲直が如洋合の發起人を頼むて来て預るを安く、
野澤が洋七秩父宮二十和田山乃を吉の上付けのが
横塚と多う、宮家から盛入と御用を仰を付けた追
り係頼人も植えて四月三日の収入がある、初めを
預金が出来たと云うので、新米四十田の帽子を掛
れと云うき、暫ういれを預つた。先甲物七例の如く、
の唐画をやつて、二杯の酒を飲ければ後、茶席と抱き二
御三師と友人と云うのが六十杯の友人の喜のことだ。
○三月三日の乗し高崎から八幡、杜け、茶席の辰後
八つと叙れ、相南の配置の先のこの茶席が出来た、三

○盛長と日盛、山崎、持合等、尾根の走公、まき、
庭日、柑柿、中、孫や橋根七、何んか正北の
と、い、安、中、者、か、あ、ん、か、共、家、に、運、ん、だ、建、て、つ、け、る、こ、と、と、ま、ら、う、て
あ、れ、最、も、高、價、ち、か、五、千、四、三、千、四、二、千、四、と、い、ろ、く
あ、つ、し、と、あ、の、松、待、日、で、あ、る、は、え、冬、念、と、茶、を、供、し、て、あ、れ、
こ、ん、の、清、澄、合、の、出、陳、び、あ、る、と、い、ふ、が、茶、室、の、実、物、と
高、價、と、い、て、出、す、こ、と、の、橋、邊、合、と、あ、つ、た、か、ら、始、め、て、い、ら、ぬ
い、か、に、東、の、こ、の、テ、ハ、一、ト、は、七、標、も、う、と、茶、室、に、建、て、い、ら、ぬ
ふ、正、北、つ、き、と、ま、あ、つ、た、い、ら、ぬ、高、崎、の、高、崎、屋、が、始、め、て、あ
の、自、合、の、こ、ん、を、見、て、い、ら、ぬ、茶、室、の、今、日、の、洋、式、の、ア、ハ
し、下、の、方、で、出、来、て、い、ら、ぬ、池、合、の、形、屋、と、い、ふ、が、庭、中、を、
満、り、と、い、う、が、ぬ、れ、た、と、い、ふ、が、池、合、の、形、屋、の、用、い、ら、ぬ、

その如きもの日本風なアパートを定から、今日海内
北房舎のやうな心づからうら感して居ると思ふと、自分
が今更な事なことも事づくしく云ふまでもなく、アパート
式の家屋は温かゆわいともある、木の塔の旅館をい
ハニツ向三河屋の二戸がいくらか出来ておて、家族の滞在
用としてある、氷川神社境内も此式の旅館がある、
若い頃度泊つたこともあつた、こんをアパートといふものは
實に日本式のアパートといふ庭もある、樹木もあつた、
少漏つて目掃羅といふ試み、心地がよい、廣い土地の個
々のアパートを都市内の他のところの敷地、敷地、
が、或る階級は、油法、あつた、其後、地、斯く小別、
多く設け、^{（無）}樂所や商店の賣場、の備、の、の、

年十和の湖を訪れた時、見ることがあつた、あの○セアパ
と見るべきところがある。自分自らの経験もあつた、嘗て
しも石川、日向、及び、住、に、吹、集、の、華、族、の、住、居、と
して家を半分仕切つた、一方の庭つき、の、住、居、を、修、り、し、
た、こと、が、身、神、田、の、様、子、を、み、た、時、は、久、張、花、半、族、が、
今も、考、考、と、笑、つ、て、く、ん、ん、と、い、ふ、も、と、ん、ん、と、い、
ふ、い、ふ、い、ふ、も、あ、い、る、。日本、人、の、ま、さ、に、
階、の、部、屋、を、エ、レ、ク、ト、に、上、下、し、自、分、の、新、居、を、出、入、
し、た、こと、が、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、ふ、い、
位、に、か、ら、日本、式、の、ア、パ、ー、ト、を、巧、み、に、エ、レ、ク、ト、に、
階、の、部、屋、を、修、り、し、た、後、を、修、り、し、た、庭、附、の、使、用、を、
の、煩、を、避、け、家、賃、が、低、く、な、る、を、選、ぶ、の、が、多、く、あ、つ、た、

と成すはまを書きたる所。

(四月二日録)

以上を書き終つて日本式のアパルトは先づ括と棟割を
屋の屈するべきであることと又氣がつかうところだ。この
根を回すも懸に柱を合壁にあり懸に柱をアパルト
と同式にありつゝ各戸の便所はも共同便
所が添つておる。此の所も各人の住宅に相違しれど
此が其の様式に懸をアパルトと違つて置く
ばかり、アパルトメントの後の所々には其の
く日本である。

○散策中地下城を、乗つてフト入るにこの地下城は
便所のまゝのことであつた。今の家地下城全体の礎
時分も短ういから、便所の設備の不安のやうに思ふ、誰ん



七苦傳をいふのせうだが、此の條が延長するにステーション
の無くてはならぬ。地下に斯の設備を
するに、衛生上や汚物の排出は地上と異つて
左の面倒がある。西洋の如くしてゐるが、
芝をいふ。こんなことを考へて穴を生の流を
ることも、大山原をぬぐう。此の山探掘の深く窟
中へ、此の出入り、此の出入り、此の出入り、
聯想して何んか其の能を得るのや、一笑を禁ず得る
ころだ。

○又後をいふ。此の認識を大きくする。自分いふことを言
い、いふ。此の言葉、朝日の白の言ひとす。不左の
や、いふ。

潜然

昨の法華の如き余の痴情を乞ふことを請ふに
 江山の真田銅鈴歌、法華山宋藎溪の詩情白石の鳥
 江詞、古入隆古の海色横巻、阪口五生年の鶴血石歌等を
 申し示し豊酒歌賦におおし

四月四日録

の身寒く道中志と云ふ語の意は、簡く唯物論
 を打破した語と云ひざるを得る。身は九尺二間の徳室
 仁住し七七心の宇宙に道進し天地を去れし人の
 こころの哲人や名僧をいづく事ある。世に人んれよ
 を誰れかとしやふと云ふ物語は豊かきよふを奉け
 るが例で、道に人んれよ言ひ換へんは精神の優
 れて森羅萬象を空手の上と素し、乾坤を口録有し

てあつたのと倒却するが、実におかしきことと、むむと
 ありし物語の録有ありし、精神非物語の録有
 ありしけん、むむと、前ありしむむと、事ありし
 りかある。後者ありし、無縁である。前者
 の眼ありし、録ありし、自由を困める、後
 者ありし、録ありし、事ありし、例を取つて、
 と今世界の有名なる中、ロウファエラをいひ、
 女人の居るに千五百万年ありし、庭をいひ、園丁の
 七七千八百人が仕はんと居り、其師堂の物語一
 百五十年ありし、位へし、素は、録ありし、
 七位へし、素は、録ありし、位へし、素は、
 七位へし、素は、録ありし、位へし、素は、
 七位へし、素は、録ありし、位へし、素は、
 七位へし、素は、録ありし、位へし、素は、
 七位へし、素は、録ありし、位へし、素は、

生かへて何れ
と七持をなせる
一人間こそ最
むたむめ一人間

く空の業をもち、斯る金持の外郎から見たら羨ましい
やうなものが、世の人とちがひて又他人が羨しいこと
ある。心は大地を領有するほどの枕をもちて寝ておを
ずも盗むものも、^{粗衣の類}天竺があらうと犯さるることも、
減らす程減る人金、取れ多くの人と考へても及ばず
亦別に費用のかけこころも要するのとすると、非物質の
ものより富をこぼれれば富家が且の幸福の富家は云
ハキリと洋物なるもの。世の人から見て富者たることを
つとめたい、物質慾の根柢たる。輒々も主人の罪科を
犯してまひし金儲けは趣のいふところか。
○佛教も大乗と小乗とがあり、小乗を起したる
が大乗もある。白人の富はく思ふところか、神は小乗



と大乗があらう。科の根柢は教を又あつて
理窟づくも、おと空の理窟の合のつと一七二七と
排斥するの、世界の合のつと。保一といふ小乗がある。例
へば一とを合するが二であるところ、^{一七二七}作ら疑はるるこ
ろ、動かしらるるもの、^{一七二七}必しわしをう
むい。男一人女一人が夫婦とらると、^{一七二七}合はせし二
人である。けし、^{一七二七}まかり子が生んこと三とらう。四とらう。或
ハ十とらう。一七二七の教を起したる、^{一七二七}教理は私か
大乗科とらう。一七二七の合はせし二
ことが日本の四体ステチをつける。よめとやうな、^{一七二七}こゝか
一七二七小乗論から、^{一七二七}概説が起る。わづら日本特異の
國体を理窟と離れて其の歴史から考へると、^{一七二七}概説

昨夜君何處 莫在是 平原君情不可隱 君衣
在別香 梁四拜美

のけの鐘を 双方うその突き別れ

休恨を 梅ありの枝 落飾 恰村 為所人

春を春二つうらむ心 冷や枕

若の世のめ即 宵も月や花

子るさき 心まの産まぬを 消けし

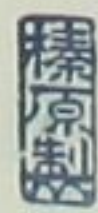
所牛の 柳のうらましの かんやくしを 黄うせにせし ちき

ニ麦畑 (浪巻) 麦歌 一 登程 おつ 倒し

梅の和歌や 倣句も 久野のまきらけしもある 時即 梅ありし

く感するよめが ちんむも さいわいなる 人も 左の 柳あり

吉原山 ことの 梨の道 ちんむい 見ぬ ちんむを 見せ



藤ん 二つり

みづうのの 梅の 梅 歌人の 言急の 花七山を 山を

山 飯茶

まごとしん 花世の人かな ぬこー 梅の 誰も 山い出

つらむ ちんむ 成言

咲かさん 梅の 人の ちんむ 梅の 仇の さくら

ちんむ

命も ちんむ ちんむ ちんむ 花の ちんむ の山 白箱

釣鐘の ちんむ ぬん ちんむ 梅の ちんむ

死仕が いちむ くと さくら ちんむ ちんむ

天から ちんむ 降つ ちんむ やうん 梅の ちんむ

ちんむ ちんむ 花が 咲か ちんむ ちんむ ちんむ

その月をくちんかんくちんくちん

木のこまをけし給ふ極の事

茶の序に記したる聖徳太子教則を記す

萬物一馬 直如弦死道也曲如鉤反封是

一馬不殺而鞠

十方無空地空大地無寸土

鼠入錢筒技則窮

土偶謂木偶

上山捉帛易、開口借錢難

地以上即天、母曰天之高也

南山起雲北山下雨

至人不留行 在子



世短事多

拙之一字免了千罪

若女子元来不廢錢

赤不靈丸不大、棋妙子無多

雁膺為翅、翅高北元

圓の減史不可減

美人自古如名將、不許人間見白頭

巧者拙之奴

水落石出烈士骨格

抗之則在古雲之上、抑之則在深淵之下、用

則為虎不用則為鼠

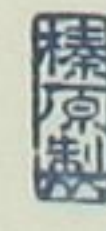
盜佛錢買佛香

味無以和羹、土木無以構室、二不稱衆體、一藥不
療殊疾、一彩無以爲文備、一物無以階其器、一言
無以勸衆善、善一戒無以防多失、李師政内徳に
○このころ或る酒席の解後、野合と云ふが話題と
なり、錯といふく語り出して、世が賑つた或るもの自家
の経験と語り、或るもの同様の事案を語り、或るもの
ハ春畫びかつたことを語り、自分の実験もするが
甲舎より珍しくかゝることがある。若い同士が盃踊りに
相擁して人無き蒸坊を潤房に充てた。あせり不慮
こまぐりこんたり、麦畑を畑としりするやうなことが
頻りにある。川柳も、麦畑の盃舞おつ例しと云ふ
右原校舎の狂歌も、ふ牛の挿れさうのりんさし

漢の制

を世より二世と云ふる麦畑といふて、兎角麦畑が畑
原と云ふ。若い同士が山稼に出うけを畫の休みに林間を
潤房に充て、汚紙を遺棄して、（注）敷きかゝつた例も
ある。或るもの野合の秘訣を語り、先づ山中二人の有無
を験せん、（注）群をくくると云ふ、（注）人あひひ必ず
應答をせよ。例として、野合が始まる。貝持羽
織を脱して女の頭髪を捲き、志らせるといふ、頭髪を巻
くと附着するから、此と云ふ。田舎の少年少女は早晩十二三才
位で早く、（注）妻を、（注）菜鳩と云ふりこんたり、野中の祠を祀
席を充てたりする。大腰を奴にせむと云ふ、男を自分の寝所
に誘ふ、（注）中、（注）女の枕頭をこくると云ふ、是らんまゝと男を
背負つて胡麻化したと云ふ。或る汽車の中は或る浴室

此のことがあつた。其書生は必らず毛布を捲きてゐる。野
合と印したことを。江戸時代のいふは茶屋ハミツ
あつたが、こんな坊頭の町合所であつた川柳ニ武
士といふ人々あつたは茶屋とあつた。昔の二カゲを
坊頭ニ提供する野合所であつた。昔町の二角の口
リである。いは茶屋とあつた。坊頭であつた
と云つた。昔茶屋の往の役者の野合舞台と云つ
たことと言ふもあつた。今の役者も大概野合所
あつた。昔の道中といふ名をいふ。彼等が遠くを
つたから、名を野合所であつた。云つた。昔のけいさつ
くあつた。野合の場をいふ。一七尾のいふいふ
と印だ。



○昨夜の決心のたゞ又感激の夜であつた。其去朝日の飛行
機神の龍が龍動入る後空の日に羅馬着と少きや
や安心し、寂に就いたか。昨夜の内々遊に龍動出知
り知り得る。龍動入る日本時より十時龍動入
り。夜更けに入つた。この報報があつた。後八時三十分
に着いた。と知んた。行程一萬五千キロ。九十四時十七分
と云ふ快速力が成つた。従来欧米の間もあつた。翔機が
試みこんだ。昔の成つた。成つた。初めは我白
本七日半か成つた。而も機は我回産である。此の壮奉
決して一新の社の行事である。回家の面目をのけるの壮奉
が。其の名を我回家の名をいふ。折も折秩父宮殿の
日。龍動入る。其の前駆し。此の壯奉の目的

従來の南方コース

總記録を粉碎す

燦たり「神風」の新記録

「神風」は遂に東京ロンドン間一萬五千七百七キロを四日に満たない短時間で結んで、中歐南方コースに突如ある新記録を樹立した。去る一九〇三年アメリカのライト兄弟がキティホークに人類最初の動力飛行を成就したときにはその飛行時間僅に三秒半、距離は四十メートルに足りない……たゞの一と飛びであつたのに人類最初の飛行を意味する驚異の数字としてこの飛行は永久に全世界に記憶された。爾來三十五年航空界は富時夢想さへ出来なかつた程の大進歩を遂げて、現在では高度、速度、距離……すべて人類數千年の夢をそのまゝ現實にうつした様な驚異の数字にまで躍進を上げてゐる。

例へば高度の世界記録は一五、二二〇メートル、これを横の距離にするとは日本橋から京濱国道を六郷の橋まで走る長さを縦に空に昇るわけで、世界の最高峰エツネレストの約二倍弱、高峰富士の約四倍半に相當する、スピードの世界記録は毎時七〇九・二〇九キロ、東京から一路東海道を下して大阪を過ぎ神戸、岡山を飛越して更に廣島の上空に達する……百年前の大名行列なら正に月余を費した長距離を僅々一時間で飛ぶ速さ、驚く勿れ音の速度の三分の二に達してゐるのである、もう少し速くなれば爆音が聞えたと想像間に飛行機は天上を飛越して姿を消してしまふことになる。

又連日飛行距離の世界レコードは九、一〇四・七キロ

東京 から一氣に東はロシア、西はベルリンに飛んで、南は南緯線たるものが、地球の周りを赤道上で四段跳びに飛行出来る程の性能である、この距離

航空機世界最高記録

種目	距離	時速	保持者	國籍	年度
無着直線距離	九、一〇四・七	—	—	—	一九三三
速度(水上機)	—	毎時七九三・九	—	—	一九三三
同(陸上機)	—	—	—	—	一九三三
高度	—	—	—	—	一九三三

長距離連絡速度飛行世界記録

種目	距離	時速	保持者	國籍	年度	備考
米大陸横断	三、九六九	—	ヒューズ	アメリカ	一九三〇	未公認
ロンドン(英) - パリ(佛)	二、四〇〇	—	スコット	イギリス	一九三〇	—
パリ(佛) - 河内(佛)	九、一〇四・七	—	ジャビエ	フランス	一九三三	—

主なる南方コース飛行

年度	國別	操縦士	コース	備考
一九二〇	伊	フェラリ	ローマ - 東京	最初の歐亞飛行
一九二四	米	シエロー	シエロー外一行	—
一九二四	米	スミス、ネル	西遊り世界一周	—
一九二四	佛	ドアジ	パリ - 東京	—
一九二七	佛	コストル、ブリ	東遊り世界一周(太平洋に船)	—
一九三六	佛	ジャビエ	パリ - 河内	—

飛行機を次から次に中継して長距離を飛ぶことにすると途中の給油時間をひくるとしても結局スピードの遅い長距離機で無着陸一氣に兩地間を結ぶより速く且つ飛行中に起る前途氣象變化の危険を避けることが出来るつまり「急速」「安全」を目標とする實用航空の眞義に近い。

「神風」の場合は即ちこれなのである、この種の世界記録として世界を驚倒させたのは去る一月、ハワイッド航空界の千両長者ハワード・ヒューズ氏が自家用の特殊長距離機で米大陸横断コース三、九八四キロを七時間二十八分二十五秒、時速五三三キロといふ

先に

ゴール東京を目指して、惜しくも不成功に終つたジャビエ氏のパリからハノイまでの記録と今回の本社「神風」による東京ロンドン間の光輝ある新記録とを、なほ今回の東京ロンドン間長距離高速飛行記録は立川田原の審判に當つた帝國飛行協會と東京ロンドン到着の審判に當つた英國飛行クラブとが合議の上近く國際新記録として國際航空聯合會(F・A・I)から公認されるであらう

實現し、遺憾なく、純國産機の威力を發揮し得たことは、國家のため、國民のため、吾人の欣快推く、能はざるどころであつて、感激感謝の情、湧然として抑へ難きものがあるを感するものである。

今次未曾有の計畫が、この空前の成功を収め得たについては、機名「神風」の表徴する皇國神明の加護に依るところ、もとより多きを感ずると同時に、わが朝野官民、一體不斷の絶大な支持援助に由ること極めて深く、かつ切

歴史の上の一先驅たる存在に過ぎないものとされたのである。近く九州において暗夜墜落の慘禍を蒙つたジャビエ機は、パリ・ハノイ間に世界記録をとめたとはいへ、その壯圖は、遂に最後の凱歌を奏せしめるに至らなかつた。

これを思ひ、彼を憶ふとき、今世界を擧げてわが純國産機「神風」の有する超快速の性能を驚嘆し、歐亞飛行士、家談談士の技倆を賞讃して、こゝに日本精神の

飛行機を次から次に中継して長距離を飛ぶことにすると途中の給油時間をひくるとしても結局スピードの遅い長距離機で無着陸一氣に兩地間を結ぶより速く且つ飛行中に起る前途氣象變化の危険を避けることが出来るつまり「急速」「安全」を目標とする實用航空の眞義に近い。

「神風」の場合は即ちこれなのである、この種の世界記録として世界を驚倒させたのは去る一月、ハワイッド航空界の千両長者ハワード・ヒューズ氏が自家用の特殊長距離機で米大陸横断コース三、九八四キロを七時間二十八分二十五秒、時速五三三キロといふ

テ、日び、先輩より井白石伊勢貞丈を引くも、山上の研究
と創見の通分は等と被くともあることとを、ついでに、
い出し、北の伊勢舟の陣列も山上八郎の指図すに依りて
僅かによきあり也。

四月十一日記

辰流合の山上と鑑の瑞宗美の法を印刷した
冊子をもつてゐるは、皆心得て後人の見れば以下
の編解の只冊子かともある。
漢字の古くは時代は、甲申の古名は多いと云ふ
てゐるが、何故か其の古名は、一つ七文献に無
いと云ふ。
外圖も持去るは、甲申の少くとも、貴重である
と、神代文書とあるは、輸出を免れんと

東京

みる外圖の流出は、北の振舞江戸期の上と云ふは、
惜しむべきものなり、是れ、早利者氏の甲申が
流出し、是れが惜しむるは、外人の甲申の理解
の乏しきも、多しなり、アメリカに寄つて、インと云ふ
場所の古名がある、北人が目に肥えておれと云ふこ
と也。

戦國時代以前の甲申、所謂古甲申、いんをい
はすも、あるは、又どこかあるは、主に、似たり多し
して、その回数、多しなり、その、回数、多し
よ、か、可なり、ボロくとも、あるは、其の多く
花せんとあるは、伊豫の大三島の大山神社
に、其寶庫に日本の武器、槍と稱し、傳へ

大鎧名所圖 (明珍宗美筆)

寸白

射向の草摺

鍬形

現存古甲冑主要品一覽表 (其二)

山上八郎撰

鍬形

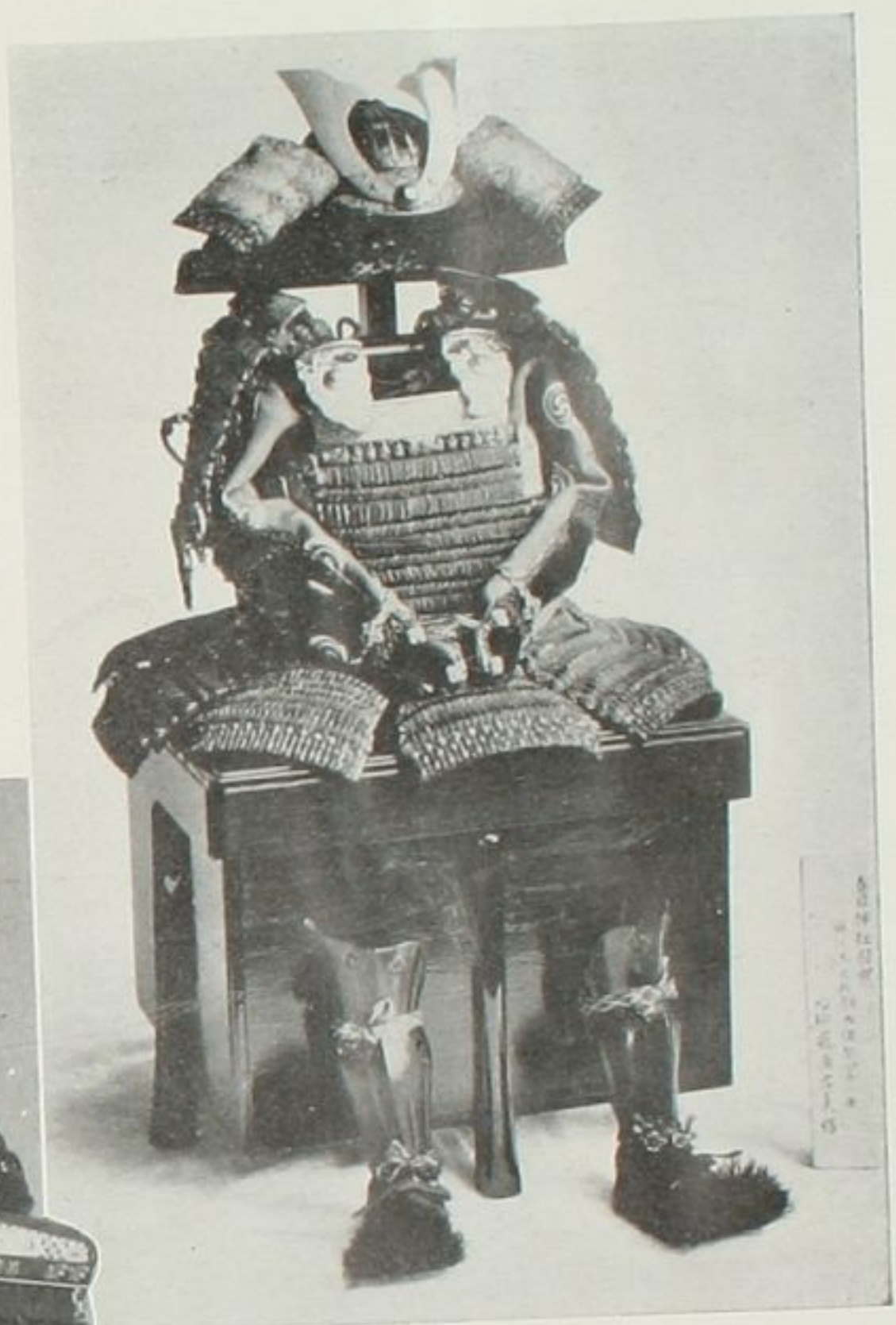
大鎧名所圖 (明珍宗美筆)

射向の草摺

年 代 品 目 傳 來 備 考 所 在

現存古甲冑主要品一覽表 (其三)

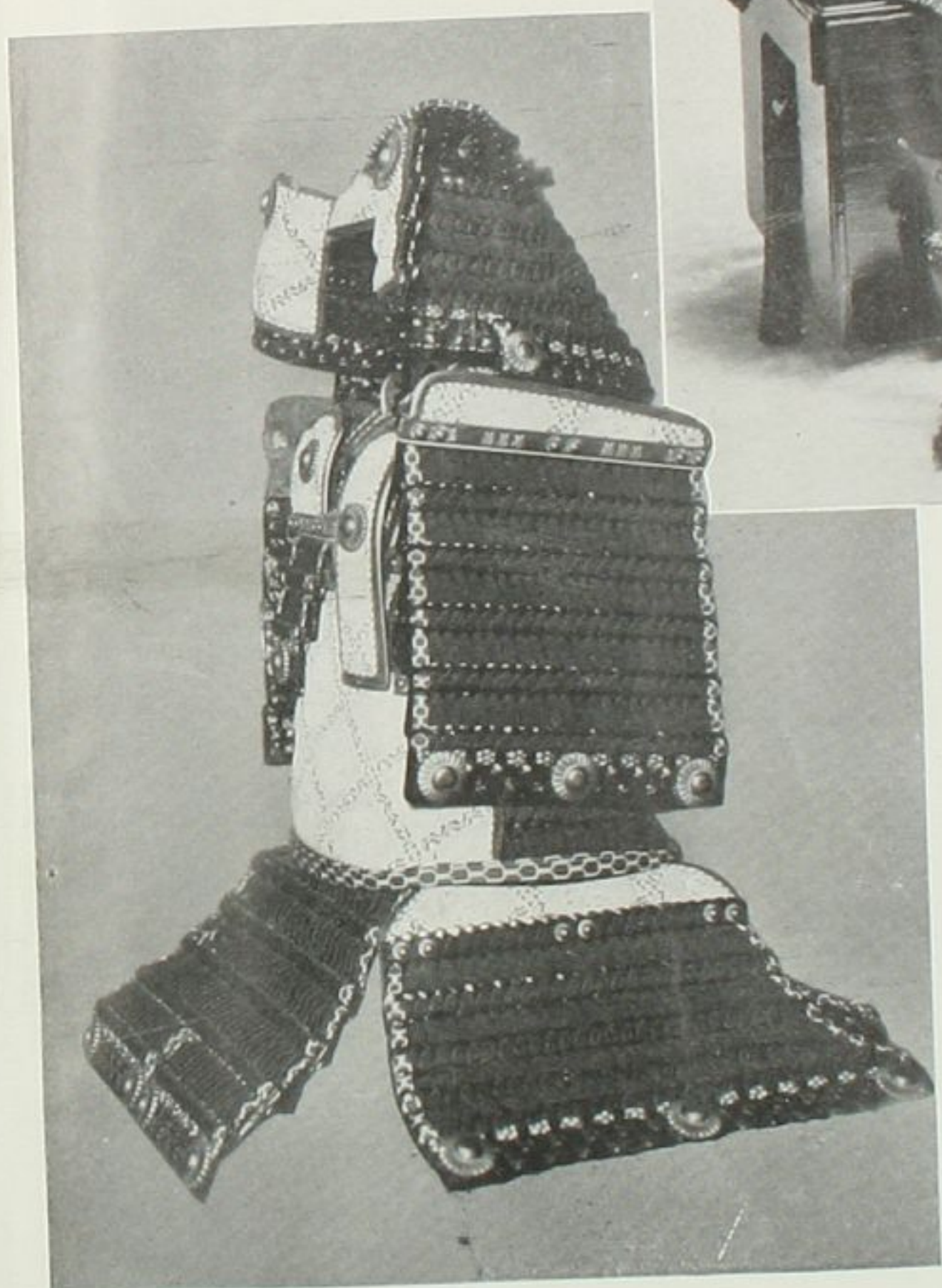
山上八郎撰



大楠公甲冑雛形

(春日神社寶物四分の一)

明 珍 宗 美 作



源平時代緋威大鎧

(據御嶽神社畠山重忠鎧)

明 珍 宗 美・宗 恭 父 子 合 作

の戦邦の古の軍化をいふと見るに曰く其鉄刀剣甲冑等
 此就て種々の興味ある種々ありて。信に難ハヤウのこと
 もあるが、その後世の考を以て若しのこと、臆測するから
 こと、いふあるが、一概に信す可くなく、信すべきことあるの
 じウツカリ出来らぬ。源平時代と云く、頗る遠い過去であるか
 ら文化に二重の極めを初極むあつたりと想像する如き八癖
 がこころい、ある二重の極めを、寧ろ後世と云く、進んでい
 る、即ち武器に二重の極めを、其の先の上から、尤も進歩したと云い
 る、又其の遺物の例、いふ、源平の時代、いふ、源家重武の遺
 とす、刀剣の如き、利産其後、及びその如き、いふ、と云く、
 兵器の内、身体を直撃して死活の目命がある、刀剣の如き、
 よく、銀へん、尤も精銳で、先師の大物甲冑的の格、格、

と馬上の模倣し得るやうな且つ軽くとうとう折れぬやう
鍛錬すべしと云ふ事だ。大甲の持料もさういふ品位を持たせ
ぬと云ふ事だ。刀工の腕を鍛へてまじり成甲のひびき
から、刀剣の傑作の早く此頃であつたのも不思議である。刀剣
既に然りし身を防ぎ渡る甲冑も亦さう考へるべき持料を
考へし。○中を想像するに、次に想像する難くさういふ。
刀剣の鏡利のくも、鐵三を断つたと云ふから、甲冑も又
刀剣と似た鉄三を穿たぬやうに、二刀に相違する。世に流す
時代を下つて、永四時代の事として、軍紀に傳へられてあるが
此は、伝説の甲冑の武田家の傳へる鎧の楯無と稱せられたる
ひびきかうも、さういふと云ふ、嘗て試験したる事さ
矢に立らうと云ふ。亦、武田信玄が幼少の折、此等刀を



彼兄職を奪ひぬれり。年長しと遺恨を男ひ之を取らば
す為め、我頃い後兄職であつた敵上卿を、矢にぬらひ
打つた所上卿、一矢の打死を、さういふ位、鎧をさか
へし、脆く矢の通つたのを、不快な感、自分と犠牲に
する決心をして、着用の上、人、射らせたが、所謂楯無の
威、此時入現はんと矢、徹くさういふと云ふ、こゝを解す
さういふ思へ、同じ鎧ひ、持手、さういふ、重威の可、持手が
野まの、重威の可、こゝの、矢、甲冑を、神、重、あ、さ
の、如く、兄、故、さ、い、今、か、一、概、二、位、を、持、か、さ、い、い、が、あ、さ、い、か、さ
ハ甲冑の如き兵器、其の備用者と由つて利鈍があつたこ
と、~~利鈍~~も事、定、い、あ、つ、た。人、由、つ、て、利、鈍、あ、つ、た。他、の、一、例、に
矢田作十郎、輕の茶三の、戦、の、敵、の、畏、怖、し、た、さ、う、い、ふ、依

十郎が死を歎いて馳駆すと敵に追いつけり。向ふは河部
四郎より志政が、ある時借用を申上りし時、大田の借用と云ふが
預け度す。後、先づ膝痛者、貸すことと云ふ人、と云ふが
遊り、又貸し、此の敵の矢田、貸すことと云ふ人、と云ふ人
も、この敵の、河部に聞かして其境を返すに、鯉の七う死ん
だ、と云ふと受取らるるに、と云ふ人、鯉が強よいの
で、よく冠り、手加強よいの敵を畏れ、いぬか、生還を期
した膝痛者、貸し、此の鯉が、靈威を失ふ、と云ふと云ふ取
らるるに、~~此の~~武士、~~いぬか~~、~~向ふ~~、~~如~~、~~ある~~、~~意~~、~~氣~~、~~が~~、~~此~~
~~境~~に靈威あるに、~~いぬか~~、~~向ふ~~、~~如~~、~~ある~~、~~意~~、~~氣~~、~~が~~、~~此~~
を用ひ、よく精神と云ふ氣が、靈威を生ん、と云ふ、武士
的生活を知らず、解し難いことと云ふが、當時、日、決して、理



の理と云ふ、いぬか、向ふ、如、ある、意、氣、が、此
甲由月を作る、いぬか、向ふ、如、ある、意、氣、が、此
十郎、正勝、と云ふ、具足師、の、強、凡、の、徹、く、る、の、程、を、考、へ、し
て、此、州、者、と、就、し、此、時、度、の、古、ま、ま、試、み、と、云、ふ、人、也、其、時、度、
十郎、の、歎、く、い、自、分、と、云、ふ、甲、由、月、を、着、せ、し、め、ん、と、云、ふ
人、也、此、物、後、七、其、の、意、氣、と、自、信、と、感、服、と、云、ふ、試、得、
を、見、合、ひ、と、云、ふ、人、也、甲、由、月、の、創、成、者、七、斯、の、自、信、を、も、ち、
得、る、ま、い、創、成、者、七、再、精、と、云、ふ、人、也、此、等、種、々、の
甲、由、月、の、ア、チ、リ、ト、ト、と、味、つ、て、神、風、雅、の、趣、事、龍、動、と、云、ふ
人、也、と、思、ひ、判、る、と、云、ふ、人、也、甲、由、月、の、創、成、者、七、終、末、者、と
甲、由、月、を、著、け、る、人、に、懸、言、ふ、べき、也、云、ふ、人、也、飛、行、機、の、創、成、者、
七、優、秀、也、と、云、ふ、人、也、云、ふ、人、也、之、れ、と、操、縦、者、と、云、ふ、七、優、

秀の人のけいけんは、身体格好の強健を要する、勿論、
その測定より、緻密の頭脳を要し、暗期反復の才能
がある、格好は、ぬらみ、大勇である、ぬらみ、ぬらみが、其の
武人的の勇気と、事を遂行する、決意、
けんけん、此等の諸、早撃の、武將と、今、其の
を、田舎、こゝ、始めて、兵器と、操縦し、其の、
す、その、即ち、校と人と、自身、一体、
す、所、一、萬五、千、キロ、の、長程、を、
この、飛行機、を、他人、に、搭乗、
曹の、借用人、と、曰、失敗、を、招、
行、械、の、精、
攻、
所、を、



人の、重きを、置、
主義、の、
却、
ツ、
変、
所、

○日本は、工、
か、
ゆ、
作、
押、
け、

のん我邦の古の時代の甲冑は成人の日々つくやうな工
 夫と云ふべきである。鎧の威いの色の地を濛い色
 がゆい澤でも多いが、多くは頗る華麗の色に緋おと
 しの鎧をいふも目つき密いもので、色が若い人の限ら
 んばかり思ふのは近代思想で、老将と云ふ地色を用いた。
 或は五色を交へて錯綜の美を呈し、よみがあり、然るに
 の色に則つたものがあつた。金物も金銀のキギを大に
 一層發揮し、華やかであつた。文様の工も錦襦も
 袴も、袴は夜用といふ、女の高衣、袴、袴は空に驚心駭目、袴は値し、袴は荒漢
 の戦場を彩るべき、袴は斬りかゝるべき、袴はかと思はれる、袴は程で
 日本の古年がいつの世も、袴は武將のあつた、袴は早か、袴は錦給ひ、袴は武將
 が材料とらるる、袴は甲冑が華麗であること、袴は主因であら



う。えんも自然高武の気も春らんれがあらうか、何故に
 武長の比豪將にせざるものも、武長の色は、武長の裝飾に、武長のよか、武長の近
 代思想から考へると、武長の緋の色を、武長の緋格と聯想せし
 めて、武長の女性的である。よか、武長の唯形、武長の天子の朝服が緋の
 袴であつたことを思ふと、武長の武將が緋の威いの鎧を着るは、武長の
 とて不思議であると思はれる。大将は威を添へるに、武長の
 尤も目立つと華麗の色を擇んだのであらう。或は時代
 の騎射が、武長のあつたから、武長の大将格は、武長の多く、武長の騎馬の人であつた、
 或は、武長の名乗り、武長の合つて、武長の騎打をやつたから、武長の美的な装束
 身も必要があつたから、武長の甲冑や面頬を、武長の掩ふもの、武長の
 抗の意思を凝らした、武長のこころも、武長の一騎打時代の思ひ

秋を免かざる。宮成の外苑もある楠正成騎馬の像をもと
随合有職家も冬がしむ女時代の甲冑を研究しれり
村光雲から受へたことも多し。寺川家も云いせると、あの境
の楠正時河のいふことも徳川初めいふのと云ふに時代錯誤
があるから、茶街家の画の限らず精金家亦刻を
百もいふ相も心得がきくことなり。

○山陽の御園寺始と既奉り此の古丸七因つて一時其奈
山と頼む其奈藤三舟と云ふことあり此の山陽のことも
飛い出り此の奈山といふことあり。池合ありこまき山陽を
思ふに山陽の奈都のわかれ七ある人、徳川の千代と古き
頼状もよか其奈がどんを評判がある。治國平天下とい
ふものゝわさう地が、いふ酒と飲ん心子を生かすことなり。



といふたのしるしがあつても其の隠微めなり。流の千代後名
をのん、曾つて其奈を管轄しり其奈のいふ事なり。此の
が、奈山の後年より山陽の文、服して七、頼もちり。此
の氏奈山が山陽へ来たつた詩を覚えておもはるゝ感なり。
女侍。

未将立家道出言謀我衛醜狂就傳お憶
起為疑同是夢、尊前一笑海山秋
茶山

此幅の奈山自書、其奈のいふ事から、頼家のあつたもの
いふ事から、起句の傳をん、飛走を云ふことあり。三言謀と
飛内つてゐる所、痛くかある。伊原の奈山が山陽へ来た
此のいつのころか其の詞を覚えていふことなり。

なり

○日本の古書に、又書出しに昔田方ありけり」と云ふ今、
 昔、あるものか、伊弉の物語今昔物語にあり、
 萬葉集の昔有三男、或の昔有夫、ある、ある、
 上代は行いんは倭の書き方と名目思ふべし所支
 那の倭とあることを初めわづらひ。四書と云ふは尾
 張真福寺の瑠玉集二巻の宗末の如く種々の説法を
 類を分けて種々の典籍をも攝録し、れよあるか、此書の
 書き方と一種の特徴がある、花の初と昔又の昔別を
 冠して、ことか、終ひもろく、伊弉の物語其地
 の、瑠玉集の、瑠玉集の、瑠玉集の、瑠玉集の、瑠玉集の、
 玉集に倭の、あることか、うまひ、瑠玉集の、瑠玉集の、
 支那の、ある、真福寺本の、空本と云ふ、李良



和の字本である、上代、早く、漢字、ある、ある、
 ○山陽が、ある、ある、ある、ある、ある、ある、
 あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、
 へ、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、

評經羅裳拂暮烟、粧成踐約納環玦、
 份之月色交燈影、不滅檀郎在那邊、

珊洋題

流石に珊洋と云ふは、雅な、あり、あり、あり、あり、
 印の、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、

○往年の、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、
 甲子、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、
 く、他、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、あり、

○山本祐遠の用印は、まもり亡びて天地間を存せしが、
とあるが、細川春利の大印三顆、幸に遠を免れ、浪
島の南画家（其名は忘るるが、十数年前東京に来り、
徳島の姓来し）の年々在つて、畫堂の三字を刻し
て、印一顆を贈るべしとあり、今も築中、
當時他の二顆を、詩人と欲せし、此畫家、
為め終つて一見すことを得ず、今に於て、遠を免へ
るが、今人の年々、
用印とて不似合、
を見、
を、
新年、
印、



如くして見れば、一柄、
松が画、
てあつた。林、
○電氣作用の、
今、
却、
の、
見、
ハ、
此、
示、

2 観説が出来たか天体の流星が輝いたとて回極するも南極
北極も以て眼鼻に入り来りアサウシハ星の名や距離
を以て手を取る如く説ぬ事のみ此後に入ると今も明記致さ
仙人が龍をよると云ふことと交へた。大政のやうな物語は
忠の淫の意も龍脱の良訓である。

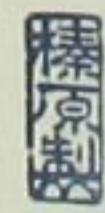
○散策中り自分の胸に二寸五分の鉄
一尺の道を五月か直つてのちヤヤト七吹流しを飾つ
てある所があるが或るデパートのしきウウエントー七尺五
寸敷き法ある屋上と見くらぶる装し、そこへ吹流し
をまきおた。思ひつけに格別面倒な事もない装置だが一
寸思ひつゝ、障子一坪ほど下二尺と組合いせよとの尺根
居の手をみれば何れも七寸五分の白正式に組合せても



つれから、美から屋根そのものもかゝる尺根。

○日本の作庭はツゲや、ドラゲンや、ツゲの類を方圓いろくの形に
鉄が茶のり、園に尺政を添く一方ともある。自然も往々鉄を
七角の丸うりやうん見へるよみがある。神社を取りまく樹木は昔
林が風の道路を答りしもの作庭の所が、平の板の筋
り束けのくちあつたのを常て熱海を見れば、作庭の樹鉄を用
ひつゝ、或は此の自然な樹木の分ちんものか、斯うアデーヒ
ミヤルの細工の用中、飾り樹木のみの、京都の金銀閣其
化名園も多くあるのを見ると、古くからある法と見ると、自分
ハ斯う刈り込を應用し、此のを見て初めを我言を得ルもの、豊島
園に於ける野外劇場の北の東のあり、野外の舞臺がある
から、一面の芝生があるか、その北の東が茶のりあつた木上

細工をむかへて、野おの舞台の本質を北日馳し、木工をあんばい
 燃唐柄を屏風や後幕、ふかハ雨天の時の困る、芝生
 の潤和を北日幕のえつり、樹木を雨にめげず、火天を
 去とせり常、櫺窓のまをうけんが、まの島園の
 野お舞臺の北日幕の巧み、犬者きしう、フを芝生
 大道具のやうに屏風の、切つたをありとんひ、（芝生の）
 う趣をう、おのの、前りにみせ、安を得ん、好意近であ
 こ、感、野おの舞臺の、ヤリシヤハ、始まりて、あ、悲、く
 く斯る、昔、茶、ハ、る、つ、つ、れ、か、あ、ら、う。
 ○休宿のの木は、江島山人曾遊の、記念として、石の、数、百
 今、か、句、碑、を、建、つ、つ、と、あ、起、し、我、等、山、人、の、後、を、た、り、天
 る、の、人、も、と、押、毛、を、微、し、ま、ん、を、領、つ、つ、建、碑、堂、を、あ、ら、う、句



碑を余て出来し、山人の自書を刻し、松本を、今、も、未、だ、建
 設、が、ある、田、七、刺、比、の、其、後、を、た、つ、つ、句、碑、の、傍、ら、も、船、板、を
 以、つ、つ、休、雅、の、四、河、を、他、と、ん、と、目、論、を、ま、い、紅、葉、亭、と、名、の
 け、其、の、押、毛、を、今、も、需、め、し、未、だ、な、く、昨、日、二、三、枚、の、額、面
 を、書、き、ま、つ、つ、休、淡、出、身、の、鐘、工、の、校、額、を、刻、す、と、か、云、ふ
 が、お、ま、り、の、句、碑、と、も、と、自、分、の、校、書、の、傍、ら、の、こ、と、り、表
 外、の、事、
 山人、後、得、甲、の、年、自、今、が、存、命、で、保、つ、此、款、と、書、く、の、の、音
 縁、と、あ、ら、へ、き、也。
 ○此、以、市、中、ま、い、さ、る、葉、も、包、ふ、葉、水、べ、ん、ト、ラ、イ、ン、と、控、橋
 一、と、あ、ら、の、が、方、に、見、入、る、森、水、葉、水、が、お、長、く、一、次、を
 も、見、入、る、と、あ、ら、う、ふ、こ、ト、ラ、イ、ン、と、ま、い、の、あ、合、千、エ、一、ン、レ

四月十八日記

ありとわつ趣がまのいとし。批不の版南の元下二の三
を古くが例ひまの日本銀時代又早く此書法がある
まの天下一が正さん速い事書とさんよりあつて愉快
とあつても得ぬ。

○良寛法師の弟由之が故郷に終る公金を消費して這
放さんといふのがその事書に五通杜撰がある事書に
由之の妻の墓石 ●と書いれさんあるとまか自
文のまの其碑文を見まの併し其故郷ひまのりこと
ハ事書ひあつてまの此頃かさん此良寛のから由
之と其つて手紙に碑文早まを上げても文書か

えへてみる。

人七三十四十七越こおとろくわくともるんは選分
小差生一もあて大酒飽淫の定る命古きる
さうわめく十二てあふんあまはさるへん
山人の席風もおとふるもか袖くも長羅後の
袂七いかにほきをかたへさるあかひんけりうすまるところ
さうとあまなむかやまさらん

良寛

すちり花

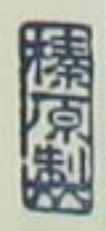
すちり花に由之の雅多葉守ひあふ北千両の折
ち等そ極の酒井千尋が江戸方面ひあ見れと
在馬形丸の近刊雜海明とあまふよふ記とん



あふ、赤丸の良寛が二十年の航海をも畢つては
あふ、赤丸の良寛が二十年の航海をも畢つては

の最平法選考ありまむ十日定とすも切迫しあふ街路
の例のこく選考爾正の標札が立つてあふ東上府
市の選考の論考も出たあふ配付せんれ投票用紙を
見ると聖名奉答この一票とあふの何んの事だ選
考の右極と銘あふ政府が大重ひさうしてあふ苦情
あひか、何ともく初めは選考もあふことく、投票運動
か感あふ、聖名奉答あふことく若くあふん標札と
しあふのこく、廿の寸の選考したあふのあき思ともあふ選
考の自由をあふ上から取帰とあふあふあふあふ取帰と

露多きは犯黨者を出すことよりも早くする。前田七郎選考
 肅正と標榜し比が是んが為の犯黨者、元々多く出れば必
 竟無智の輩を以て弁察をやつた結果、ゆるしぬ。選
 考も啓蒙運動の要否が、實の弊を以て啓蒙運動
 が必要と云へり。是れを以て、もとこりむいふ。政府も
 マット上之意思想が無くして、是れ、元々啓蒙の言を
 ハ、政黨を懲戒する事も政府自ら其の世を改め
 ばせん、今方の解散、果して主意的にあるか、此の
 既に解散の時所見を銘記し、重荷を云、人が、定
 果しんことある。政府、其黨を止むべし、何と目する
 解散を行ふは、政府、其黨を以て後進することの許
 判力あり比が、是れ、出来、心選考、孰用か。結果



判る、ハ、判る、ハ、政府、二堂の候補、ハ、ある人も極へて、ハ、
 政府、政黨の、決る、ハ、多數、出ること、ハ、合り切つて、ハ、政府、ハ、
 選考の、結果を、する、ハ、多數、反、對、ある、ハ、合、分、別、を、回、り、中、
 主、其他の、小、派、を、引、き、つ、け、て、其、黨、を、止、む、と、す、と、云、は、
 人、自、事、と、は、否、か、易、し、出来、比、お、目、に、か、い、く、ハ、政府、ハ、公、衆、
 曰、く、ハ、選、考、の、結果、政府、ハ、不利、する、ハ、再、り、解散、を、
 断、つ、て、ハ、い、り、ハ、威、嚇、の、威、嚇、と、云、は、選、考、
 結果、ハ、選、考、を、あ、げ、ら、る、ハ、政府、ハ、選、考、の、肅、正、を、呼、び、つ、
 及び、ハ、肅、正、と、蹂、躪、す、と、い、ひ、ら、る、ハ、今、の、選、考、の、場、を、
 比、る、ハ、政府、ハ、公、衆、を、左、袒、し、て、る、ハ、公、衆、と、見、入、ら、る、ハ、威、
 嚇、亦、同、じ、無、黨、を、作、ら、し、て、る、ハ、公、衆、と、見、入、ら、る、ハ、公、衆、
 である、ハ、聖、王、の、奉、答、が、あ、ら、う、ハ、政府、ハ、無、黨、を、得、ず、ん、ハ、何、田

いん解教士とてんか、二回以上は出来たことだか、或は政令の
度んで、政府の軍門に降参し、共計が多数となるが、即ちそのが
如折に養生を思ふするものも、且志願下三行せんものも
ある。全体解教を徳州と考へて、誤つれば沙汰がある。帝
山の送る者も多数を得た。いふも何んか習いあつた。更に解
教せんとする。斯る暴虎を防衛するに、えん空を政令起す
政令も起さるいある。解教を係りて、其の道を作ら
とい貴白を以て、後めりしが、相違があるのか、如折に暴
虎政令、再現のあり、えん空の運命も危くする時、きれ
やうもいふかある。

四月廿一日記

私の初めて見た東京

伴玉岡東劍刊物

春 城 生

私は幕末に生れたが、江戸を全く知らない。明治八年に東
京に遊學して初めて東京を見た。維新後、都の面目は變つて
ゐたに相違ないが、それにしても江戸時代の面影がどこかに
残つてゐた。何分十五六の少年時代で、觀察も届かず、六十
餘年の昔となるから、記憶にあることが幾許もない。聊か當
時の感想を書かんと筆を執つて見ると、まるで夢中に夢を探
るごとくで、朦朧としてゐる。先づ東京に入つて眞先きに見
たものは、何かと云ふと、兩國橋であつた。私は越後から會
津道中で、古河で夜舟に乗つた。其舟の兩國橋下に達したの
は翌朝の六時頃で、幼少から聞いてゐた橋に接近して何とな
く懐かし味を覺えた。舟つきの陸上には、多くの人が立つて
ゐて、船頭と應答してゐるのを聞くと、齒切れのよい江戸辯
の爽かさは、私を引立て、愉快であつた。落着いた宿は馬喰
町の商人宿で、徒歩で町を見物しながら、兼ねて定めてあつ

た宿に入つたが、宿が期待に背き、貧弱であつたのには、不
快を感じ、都、不似合の宿でないかと同行の人に苦情を鳴ら
したが、其頃は東京の旅館は大概商人宿ばかりで、結構の整
つた宿は幾んど無かつた。それも其筈、江戸時代には諸藩の
人は皆藩邸に泊つたから、旅舎の設備の不完全であつたのも
無理でない。此頃は後のやうに爲替の便も充分利せず、郷里
から送金する時は、出京してゐる仕入商人に立替を頼んだの
で、此用事で一二の商人宿を訪ふたこともあつた。
宿屋は商人風の打算的で、朝飯は出すが、午と晩の食事は
どうするかと、聞かれるのが例で、私は此の質問をひどく厭
やがつた。

二三日は東京市中の見物で方々見て歩いた。上野には維
新の戦争の彈痕の存する黒門があつた。まだ博物館などは無
かつた。皇城の周圍を徘徊して、其の規模の大きいのと、濠

の松樹の風趣に感服した。皇宮はまだ御造營前であつたが、諸大名の屋敷や旗本の屋敷も元のまゝ存在してゐて、それを検討して歩くのも一興であつた。芝の増上寺を訪ふた時、感心したのは、門前の松で、日光を漏らさぬ程に茂つて、夏日の炎天に涼を納るゝにも好適の處であつた。掛茶屋などもあつてそこに休憩もした。案内者の語るに、此の境内は三十萬坪あると云ふたのには一驚を喫した。今大隈、板垣兩雄の銅像の建つてある所も境内で、私が東京に出てから数年の後であつたが、こゝに數軒の温泉つきの割烹店が出来て、遊樂の地となつたこともある。

或る日は銀座を見物した、こゝこそは舊江戸の何物をも残さない、全くの新天地で、日本の玄關はこゝだと云ふので、政府は特に財政の豊かでない當時、二百萬圓の資を投じて兩側に洋館を建築した。その洋館の建築式は、今の式とは趣を異にし、飾りは圓柱が多く、皆白壁に塗り立て、大きさは大中小の別があつたやうに思ふ。何分煉瓦構造が珍らしいので此市街を銀座と云はず煉化と云ふてゐた。柳を街樹として植ゑたのは後のことで、其頃は松と櫻が植ゑてあつた。煉化家

屋に住み慣れない人達は、政府がしきりに移住を勧めてもなか／＼住まないで、随分明き家が多かつた。偶々其頃の新聞紙を披いて見ると、五月廿三日の東京日日の記事に銀座の不禮裁を左の如く云ふてゐる。

京橋より新橋までの煉化石の街衢は誠に立派なる物なれど、兩側の花樹の間の蘆簷張は甚だ雑風景なり（中略）煉瓦石造りの家屋に住む人が、立派な圓柱の間に、龜末な板圍ひをするやら、見とも無い庇を付けるやら、折角高く出来た入り口へおかしな壁を付けて低く拵らへ直し古る雨戸や油障子を立る、甚しきは簷下に薪や明俵を積み空樽を並べ、屋臺店を引つけなどは、只その見苦しきのみならず、火の要心も甚だ悪し。

こんな状態で、銀座もまだ整頓して居なかつた。但し此年の八月頃から瓦斯燈が點せらるゝこととなり、千里軒の二階づきの馬車が淺草と銀座の間に開けてゐた。此の銀座街頭で最も目立つた洋館は尾張町の日報社で、もとゑびすや呉服店が破産したあとに日報社が移つたのであつた。此惠比壽屋は三井と肩を並べた島田組の經營であつたのだ。數年後自分が日報社に福地を訪ふた時には、惠比壽屋の遺物である惠比壽の大幅が應接の間に掲げてあつたことを思ひ出す。

裏ミツソ

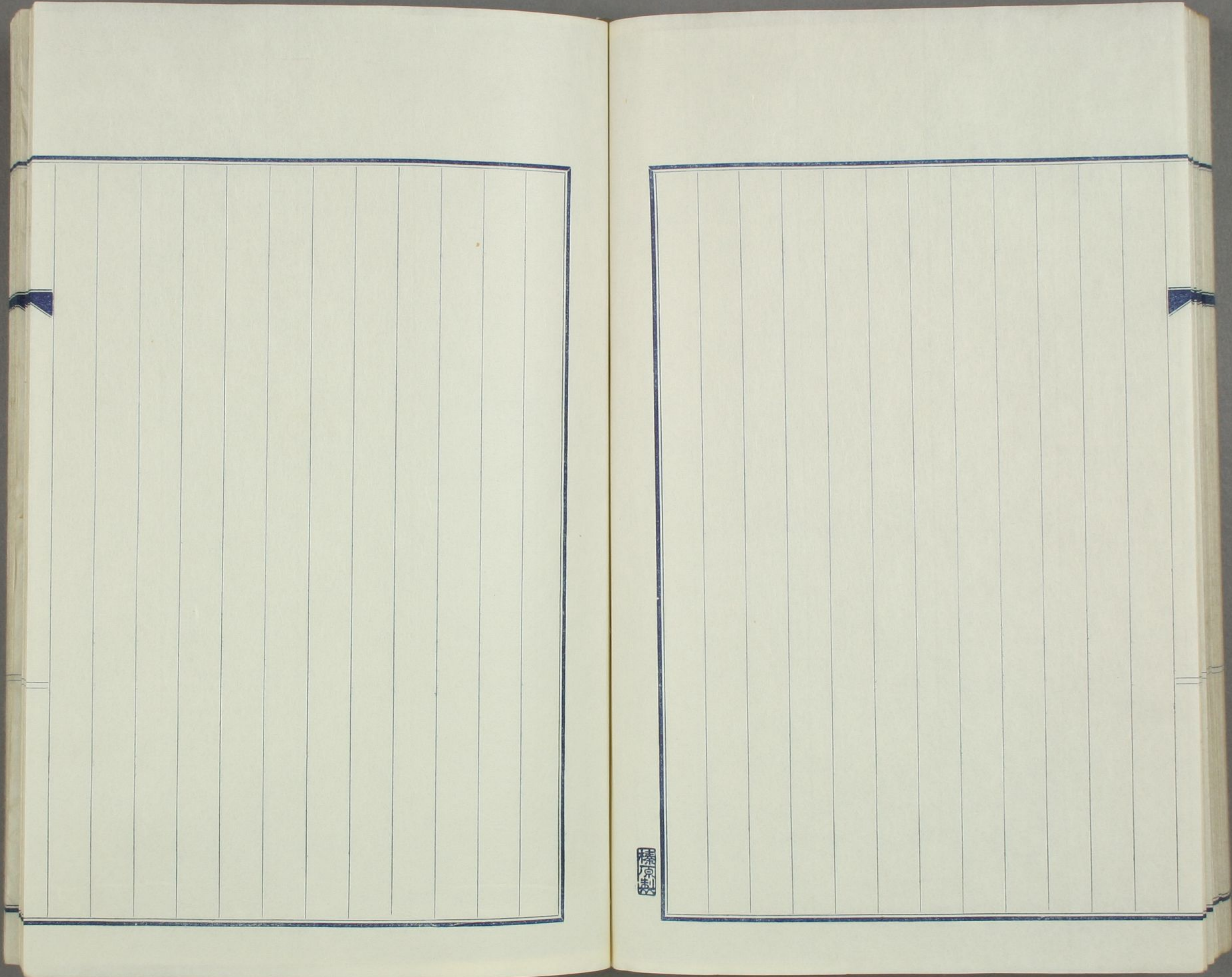
當時洋學書生間の流行とも云ふべきは、馬琴の八犬傳や弓張月や俠客傳など大部の小説を讀むことであつた。此等江戸時代の小説を讀んでゐないと同窓間に肩身が狭かつたので、私も毎夜深更まで讀み耽けつた。これが私の小説を讀んだそ

も／＼の初めで、當時文化的の西洋小説などこそ讀むべきに却つて江戸時代のものゝ洋學生の間に流行したのは妙な現象だが、當時はまだ文化的新讀物が出なかつたことも一原因であらう。麴町にさる大きな貸本屋があつて、錢湯に行く序には必らず立寄つて、いろ／＼の本を借覽したが、あの頃の貸本屋は確かに大衆的圖書館であつた。

私は東京に出た當時は可なり勉強したので、方々へ出歩くこともなかつたが、自分の身を寄せた親族も、越後もので、東京の味噌を嫌つたので、仙臺味噌を買ふにも、足を芝の日蔭町まで運ばねばならなかつたので、私も時々買ひにやられた。番町から芝まで可なり里程がある、俵にも乗らず、重い買物を手を持つて往復することは相當骨が折れた、今考へるとよくあんなことがやれたと思はれる。亦更らに思ひ出すことは私の叔父が上京した時、日曜毎に訪ねたが、其の寓所に到るにはどうしても柳原を通らねばならなかつた。其頃は夜鷹なる私娼が、あの邊に出没して、通行人を引かける頃で、

暮夜歸へる時は如何にも氣味がわるかつたが、幸に無難であつた。あの頃の柳原は随分さびしい所であつた。

あの頃の東京の道路は随分汚なく、塵芥は盛んに道路に投げ棄てる、牛馬は街路に糞便を垂れ流す、雨天になると道路は泥濘が深く、逆も靴などで歩行が出来ない位で、小路などは殊に汚穢を極め犬の糞や人間の小便で、臭氣が鼻を撲つて不快を極めた。違註罪と云ふ微罪を取締ることに警察が鋭意したのも無理からぬことだが、違註罪は多く罰金を課したが其條目は數十件に及びな／＼煩はしいものだ。左なくとも威張つて人の氣をわるくした邏卒は、無闇に人を叱喝したので、これほどいやなものではなかつたが、今の整頓した市道を見ると眞に今昔の感に堪へない。



1911

以下
5丁
白紙

加之君が人に信頼して一日事を託した以上は、飽まで其人をして自由手腕を揮はしめ、而かも責任は總て自から負擔する襟懷は、確

稱讚されたのに徴しても、牧野君は確かに得難きの統率者であつた。伊藤仁齋が云ふた、君子は他人の善ばかりを見るので接する人總てから尊敬されるが、小人は他人の惡ばかり



君も、君の中の一識者、明立派、ゆるゆる直にである。失つた私

牧野謙次郎君を偲ぶ

松平康國

牧野謙次郎君は國から東京へ來られて、間もなく史談會へ入られた。これは各藩の人が寄つて維新當時の史料を持出して、事實を檢討する會であつた。それに私の叔母婚の川村正平が關係してを、或時私に、史談會に牧野といふ若い立派な學者が来るが、實際したら益を得るであらうから其内に紹介しようと言つたが、その後牧野君の方にも私の話があつたと見えて、私の矢來の家へ訪ねて來られたのが實際の始まりであつた。

聞けば牧野君の嚴父は尊王家であられたが餘りに薩長が跋扈するので愛想をつかし、彼等の私心を摘發して後世に傳へたいといふ考があられた。牧野君はそ志の繼いで東京へ來られた。それ故に牧野君は維新の歴史に精通され興味も亦此にあつた。その大隈侯の眷顧を被つたのもそれが爲で、早稻田には澤山の學者があるけれ共、維新當時のことに就いて老侯の話相手になるのは牧野君だけであつた。

牧野君は始め日本新聞に筆を執りつゝ、開成學校で教鞭をとられてをつた。日本新聞では、漢文で以つて評論や隨筆を書かれたが、毎週極つて書かれたのは論文で、主に東洋の

他の人より一層心配して、何うか圓滿に収めたいといふので、私と共に調停に立つた、ところが天野君が私達を外にして直接交渉を謀つた、爲に調停も不成功に終つた、併し此れが一の動機となり學校に種々な改革が行はれて今日の隆盛に及んでゐる。

牧野君といふ人は趣味のない人で、旅行もしなければ書畫管董も愛さない、謠曲も碁將棋も一向嗜まない、只讀書と筆を持つて何か書くことゝ、人と維新當時のことを語り合ふのが一番愉快であつたらしい。牧野君の性行學術と東洋文化學會の關係とは他の機會に述べることとする。

牧野君と私とは性質が緩と急寛と狭温と嚴と云ふやうに正反對であり、學說にも異同があるに拘はらず、四十餘年の長い間謂はゆる莫逆の交を結んで、牧野君の公の行動には必ず私が關係したものである。然るに今此親友を失つたのは實に志後一大打撃であつて、心中の淋しさは殆んど言語に盡されない。

輓 牧野藻洲

天行 松平康國(東京)

深造逢原道不迂 憶曾大義與吾俱 講經詳述帝王學
脩德夙期君子儒 戚里妖氛揮手掃 史家邪說操觚驅
春風灑盡千行淚 無奈幽明忽異途

春
脩
風
德
期
淵
君
鳳
深
道
造

中
の
一
人
は
私
に
云
ふ
に
昔
の
一
日
大
臣
の
中
に
大
勢
を
論
じ
支
那
の
政
事
を
論
じ
た
が
非
常
に
達
者
な
文
章
で
私
も
始
め
て
見
て
驚
い
た
次
第
で
あ
つ
た
殊
に
日
本
新
聞
に
載
つ
た
「太后垂簾考」
は
種
々
支
那
の
故
事
を
引
か
れ
た
り
又
當
時
の
實
情
を
鑿
た
れ
た
り
して
文
章
も
又
極
め
て
立
派
で
あ
つ
た
の
で
當
時
支
那
公
使
館
で
は
何
人
で
あ
ら
う
と
頻
りに
物
色
し
て
宮
島
大
八
氏
に
問
合
せ
た
こ
と
が
あ
る

牧野野長部を哀惜す (78)

大勢を論じ、支那の政事を論じたが、非常に達者な文章で私も始めて見て驚いた次第であつた。殊に日本新聞に載つた「太后垂簾考」は種々な支那の故事を引かれたり又當時の實情を鑿たれたりして、文章も又極めて立派であつたので、當時支那公使館では何人であらうと頻りに物色して宮島大八氏に問合せたことがある。

牧野君は本當の號は寧靜齋と云ひ、約して靜齋といつてをつたが、日本新聞のペンネームは藻洲であつて、それが遂に本當の號になつて今日に及んだ譯であるが、日本新聞を見た支那人の中には、藻洲とは何人だか知らなかつたが、如何にもその議論文章の堂々たるところから、伊藤公や副島伯と同じ地位の人と思つてをつた者もあつた。

然るに牧野君は當時困窮してをられ、家庭内でも子供が生れては死に生れては死ぬといふ様な悲惨な境遇にをられた。私はいふふ様な中學校等にをくのは惜しいと考へ、明治三十三年頃と思ふが、早稻田大學の前身の東京專門學校へ引張つて來たのである。漢學の先生は何れも仁義忠孝を稱へ、何れも大義名分を重んずるが、大抵は口先や筆先ばかり

である。處が牧野君は常に實現を期待せられてをつた。南北朝正閏問題の如きはその一例である。明治四十四年の一月に讀賣新聞に、國定教科書の南北朝併立問題が論ぜらるゝや、牧野君は之は捨ておけないといふので蹶起せられた。始めは問題の性質として、貴族院から質問を出させる考で谷將軍を最責任者として望を囑してをつたが、將軍は病氣であつたので已むを得ず、代議士であつた牧野君の従兄弟の藤澤元造といふ人から質問主意書を提出させた處、政府は非常に狼狽して揉消さうとした。ところが藤澤は桂首相の策略にかゝり、遂に之を撤回することになつたので、今度は貴族院の大木伯が質問をする事になつたが、議長の高橋の爲に發言を防げられた。最後に山縣公に運動した結果聖斷一下遂に南朝正統といふことに定まり、教科書が改訂せられる事になつたのである。然るに當時矢張り此問題に關係した者の内には、自分獨りの力で解決したかの如く自己宣傳を行ひ態々吉野まて出ていつて吹聴してをる者もある。或人が憤慨して此事を牧野君に咄すと、牧野君は問題さへ解決すれば、誰がしたことになつたと一向構はないといつて、そんなことは齒牙

にもかけるなかつたが是が君の奥床しい處である。

大正十年に牧野君は、東宮御用掛の杉浦重剛翁から或る重大問題に就いて相談を受けた。そこで同志を集めて、杉浦翁とは別に運動を開始した。この同志は押川方義、五百木良三、大竹貫一、佃仁夫、それに私とて當時新聞紙に六人組といつた。此れは宮廷に關する事であるから悉しい話は差控へるが幸にして運動功を奏し、御慶事が完全に行はれた。牧野君は今日皇室の御繁榮の有様を見て死んだのであるから遺憾なからう。

學校のことについては大正六年に有名な大騒動があつて、見様にもよるが學校側と反學校側、高田派と天野派といふ様な形であつた。牧野君は學校創立の元勳たる高田、天野の二人が決裂することを痛むと共に學校の前途を心配された。又此騒動に對して警視廳は非常に冷贔であつたが、それは時の内務大臣の後藤伯——その背後の山縣公が大隈侯に對し心宜からず思つてゐたと同時に、早稻田學園の勢力を非常に忌むでをつたから、寧ろ内亂を以つて學校が倒れることを希望してをつた。その消息をよく牧野君が知つてをつたから、

ヤコフ・フイツシャー氏著

英文「良寛さま」に就て

相馬清風

ドイツの田舎に生れ、フランクフルト大學に學び、その後三ヶ年半パリで法律と哲學を學び、更に滿洲を視察して書を著し、支那に遊び、日本に渡り、東京に住み、更に新潟高等學校に招かれて越後に來、そこではじめて良寛さまの話を聞き、書を見、詩歌を読んで貰ひ、そしていつしか驚くべき熱心な良寛さまの讚美者となり、その藝術の鑑賞家となつたフイツシャー氏は、いよいよその研究と鑑賞の結果を一冊の書物にまとめて發表するこゝになつたといふ。まゝこゝに奇特なこゝである。

フイツシャー氏が始めて糸魚川の私の家に訪ねて來たのは一昨年の初夏で、次に盛夏三伏の頃しばらく此地に滞在して暑さに苦んでゐた私を毎日のやうに訪ね、いろ／＼良寛さまの生涯や逸話や精神生活について談じ合ひ、又彼の英譯した良寛さまの歌を朗讀しては私の意見をもこめた。私は當時あまり健康がすぐれなかつたが、彼の熱心に動かされるまゝに苦しさも忘れて毎日彼と良寛を談じた。

フイツシャー氏には佛教思想や禪の哲學はよくのみこめなかつたらしいが、一種の宗教的修行によつて鍛へ上げられ、藝術によつて磨きをかけられた良寛さまの人格と、その生活ぶりにはかなり深い理解を得てゐた。又その藝術については私達日本人はまゝこゝか趣を異にした味ひ方をしてゐた。殊に良寛さまの書については、彼はその線のリズムカルな變化や、墨の濃淡の配置交錯や、紙面の空間の活かし方などに大に興味を感じてゐた。良寛さまの書いた字の讀めない点では日本人の間にもフイツシャー氏同様の人も少くないが、そのピクチュアレスクな妙味を敏感につかみ得てゐる点ではフイツシャー氏

に及ばない日本人も少くないであらう。こゝにかくそれ位の程度まで彼は良寛さまの書の妙味をさへも理解するこゝが出来た。さうしたフイツシャー氏の鋭敏さに私は寧ろ驚異をさへ感じてゐた。随つて私は一通りの手引をした後は、故意に彼自身の鑑賞や理解を出来るだけ自由ならしめるやうにし向けるべく努めた。そんなわけでその後彼は如何なる方向へ味索の歩みを進めて行つたかといふやうなこゝについては、私は寧ろなるべく觸れないやうに努めて來た。

だから一冊にまとめられた彼の述作が果してそんなものであるかは、私みづからも一日も早く知りたいこゝろである。私は彼の仕事に對する私自身の驚異を一層切實に感じたいのである。又彼によつて西歐人の間に、又英語を解する他國人の間に、どんな風に良寛さまが紹介され且うけ入れられるかにも、私は非常な興味を持つてゐる。

越後の良寛さまはいつしか日本の良寛さまとなつた。そして今やフイツシャー氏によつてそれは異國人の心への日本人の爲の一つのサグリミとなつて行かうとしてゐる。これは二十年間明けても暮れても良寛さまを語りつゞけて來た私には、まゝこゝに悦ばしいこゝである。

フイツシャー氏その人が良寛さまによつて精神生活の上に蒙つたであらう良き影響が、更にフイツシャー氏の今度の述作を通して世界の多くの人々の上にも及ぶであらうやうに、私はひたすら念じ祈らずに居られぬと同時に、西洋から日本に來て良寛さまに心を寄せた第一人者としてのフイツシャー氏に向つて私は大いに敬意を表する者である。

フイツシャー氏の良寛研究は「蓮の露」と題して近く東京研究社から出版されることになつたといふ。

定價は參圓五拾錢だと聞いた。早く見たいものである。

Blank lined area for writing on the right page.

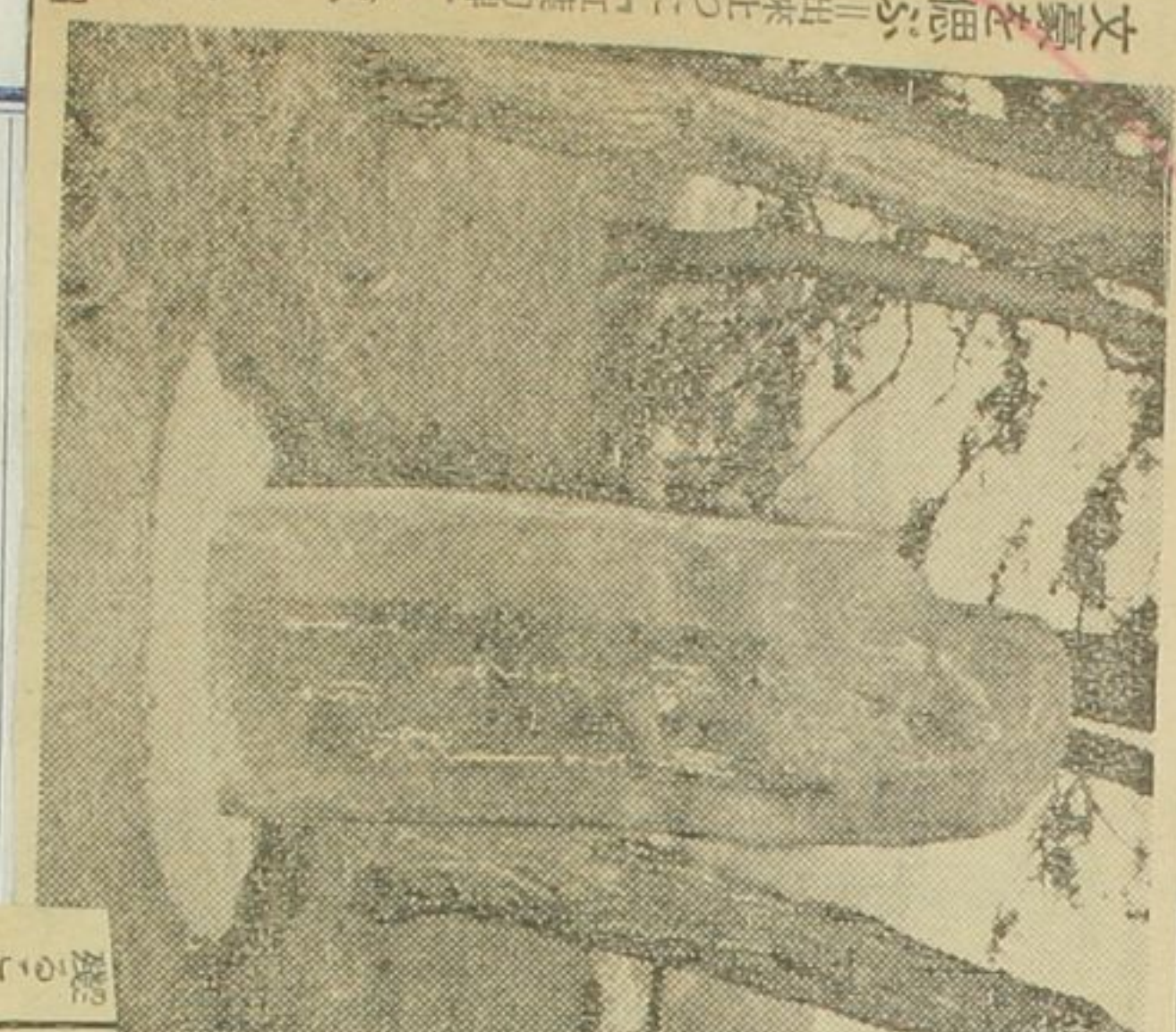
『紅葉』佐渡に蘇へる

思ひ出の地・小木町に句碑完成

お糸さんも列席・十五日除幕式

【相川彦】若き日の尾崎紅葉が佐渡に渡り、高き詠「メートル半そこ」に紅葉に蘇へる久々に蘇へよう
 と當時の紅葉の靈が紅葉屋のおい
 とんこと佐渡小木町の山野いと
 んんや阿彌野が昨年来
 紅葉を愛してゐた紅葉句碑は田
 りつけたもの、句意は月明りの夜
 下本郷土の手で東京で詠中
 あり一燈照葉の影を赤霞から
 「月づくる……佐渡に蘇へた
 紅葉」が後三週間の足跡を

町城山公園に建てられた、碑は
 紅葉が「石なを拭いて貰うて
 大な除幕式が行はれる、碑は城山
 那れけり」と傳へられたる句を
 公園の設計したるが、紅葉の
 した村山崎の近く西三川村の目
 處本郷高橋土の選定により、設
 てもなしたおいと、今も老
 眼鏡のよつる白髪となり「紅
 葉さんや阿彌」等の別名でも
 らつてゐるが十一日さうですか
 十五日が除幕式ですが、あの頃を
 想ふと夢のやうですがこれで思ひ



文章を想ふに出来上つた「紅葉句碑」とおいとさんの近影

礎ことはなやうな氣がします」と語つた



書くに困難な

少年用歴史

春城市 島 謙 吉

我が國は古今の史籍に富んでゐる。日本書紀、古事記を始めとして、各代にそれらの史籍があり、浩瀚な通史も幾通りかあるが、多くは漢文に書かれてゐるので、大衆向きの史籍がない。殊に少年用のものがない。少年用のものとしては教科書に歴史讀本があり、趣味本位の斷片的な史談やうのものはあれど、纏つた通史は無い。その無い所以は、少年に複雑な幾千年の變遷を面倒なく、倦きさせずにすらすらと讀ませて大意に通ぜしむる事が容易でないからである。で、西洋でも少年用の歴史編纂には苦心してゐる。嘗て其二三が吾等青年時代に日本に齎らされて、それが如何に日本を利したかを回顧すると、少年用歴史の名著を吾等は欲して已む事が出来ない。

幸に早稲田大學出版部が出版しつゝあつた少年國史物語は故逍遙博士が、其門下能文の人、前田晁氏に案を授けて、昭和八年に第一巻を出し、爾來四ヶ年を経て完成を告げたもので、神代より現代までを全六冊に收めてゐる。斯る纏つた少年用國史は恐らく他に無いであらう。本書の特徴とも言ふべきは、面白く讀ませる事に注意しながら史的な大事件を網羅して一も漏らすことなく、複雑なる原因結果を一目瞭然たらしめて、解し難い事には文章の内に注脚を施し、宛がら事實小説を讀む如く、些しも倦まずに讀了せしむる所にある。

高級の歴史や考證的の歴史は、案外書くに困難は無いが、少年に解らせる平易な歴史程書くに難いものはない。史學が段々進んでくると、其影響で平易に書く事が一層困難になつてくるのに、此國史物語はよくも平易に且つ面白く書かれた。早稲田大學出版部は一般青少年に普及を企圖して、今次特に廉價版を作ると言ふが、本書は單に青少年に對する好適の國史であるのみならず、青少年を指導する位置に居る人にも、必讀のものであると信じ、私はこれを推奨するに躊躇しない。

〇尾州名古未如の八谷口茂三郎とてまを尾
 州と山陽との関係を説く如くつたことか其心知るべく
 九と共心稽味として其名を其地の雑誌を撰
 べき其心人の心たる尾州をけりて山陽と孰し何れ
 所かまらか印つて、谷口を山陽の邊とて二篇を
 た、此邊より冬州の深谷親ありあり作つて書
 の記ひあり、美を刻つて法帖の概を谷口が偶々
 得れとて其世間より一向見らるる刻帳のまを其
 のまを左々体なることなり。



頼山陽と尾參地方

附 頼山陽又深居帖

谷 口 茂 三 郎

山陽研究家の著書を見ても、餘り尾參地方に遊歴した記事
 を見受けない。唯僅かに山陽年譜中の文化十年癸酉の條に、
 齡三十四歳の冬に濃尾參地方に旅行したことは孰れも一致す
 るところである。

文化十年九月に近江の諸名勝を探り、美濃に入つて赤阪に
 關ヶ原の役に屯した家康の陣屋址を觀て、不破關から遙に加
 甲信の山々を展望し、北濃に入つて善應寺に住職禪智上人を
 訪ひ、詩酒を交へて「出京三句無此娛」と唱和し、明朝、轉

じて尾張清洲に早川藤陰の庭園を賞し、翌日は再び美濃路に
 入り大垣に江馬蘭齋(天江と號し細查の父)を尋ねて始めて
 細香女史を知つたのである。夫より舟にて桑名に下り十一月
 十二日に名古屋を訪れた。當地では駒屋といふ道具屋に立寄
 り柏屋に草鞋を脱いだとある。此地では先づ蒲儒の秦滄浪及
 丹羽島、河村乾堂等を訪問して、十五日には淺井平之丞方の

詩會に參初し、宿所に山口東九郎等一兩名と酒を酌み交はし
 自耕園を尋ねて數日滞在して、桑名に向け出發したようであ
 る。

善應寺住職や江馬方では接待を受けた様であるが、他では
 餘り持禮されず殊に加納の山田維禎方では、双方の性格が相
 反して居た爲か容られず、名古屋に入つてからもあまり歓迎
 を受けなかつたようである。三十四歳の壯年氣鋭、奇警の才
 走つた青書生が何處にても歡待せられず、まさか一大著述を
 出して天下を覺醒する人物とは、誰も思はなかつた事であら
 う。後年、山陽は門人宮原節庵に何かの話の序手に「尾藩は
 秦滄浪の如きよい儒者を持つて居られる、滄浪の居る間は康
 飄字典の必要はあるまい」と諷罵した由であるが、名古屋に
 て冷遇せられた證左とも見られる。

參河には山陽の門人がある様な書に散見するが、判然其
 氏名を知らない。又參河の各地に遍歴した事跡も判明しな
 い。余は先年ある骨董品賣立に山陽の法帖版木を入手した。
 數年所藏して匣底にあつたが、今度、庭中の茶寮松澹庵を改
 築することとなり、併せて待合を新築したので、その腰張の
 材料に此版木を想ひ出し、讀んで見ると文化十年癸酉の年號

○尾州名古を未如の八谷口茂三子としんまを尾
 あと山陽との潤候し靴とひるこをかきんか知うしく
 んと典心藉取味とよまを名を此の難法を洋
 てきた、眞人の冬し冬、むけける山陽に靴は何も
 所加まらんか印つて、谷口は山陽の遠文一尾舟の
 た、此送文の冬州の深谷親あり、あり作のれ書家
 の記ひあり、美を刻り此法性の相をも谷口が偶に
 得れとよまか世間まに一向見まの刻帳ひあるから、
 の文を左に侍候することうへれ。

深谷

又深居記

古之人

參河深谷親翁。自其先世通籍。納財於州之西尾藩。及翁之身
 家道倍隆。及老授業其子。而退處於隣。已而又築別莊居焉。
 藩侯因賜名。曰又深之居。余之遊參河。求文以記之。遂激觀
 其莊。

藩城之郭。限以巨堤。老松影生。而莊依其下。雜植花卉。茶
 寮書榭皆極幽邃。而無有豪侈之相。莊之所望。山嶺綿亘。其
 在南最遠者爲伊勢。餘皆係本州土壤。懼其不脫巢居而窟宅焉。
 可謂深又深矣。而不能聊其生也。貴官大姓。據山川之險。占
 輿曲之區。尙且更。築堅城設重門。可謂深又深矣。而不能免
 於禍也。今也折柳爲樊。編竹爲籬。處都市之傍。平衍之衢。而
 翁指言其名。多余所識。蓋余嘗脩私史。於參遠近古之事。頗
 廣閱前志。今猶在臆也。因揖翁而言曰。使子生在二百年前。
 則雖有居之又深於此者。惡能得潛身而娛老焉耶。方彼亂世農
 工商賈逃竄山谷。尙日之月深安居無虞者。寧可不思其由哉。
 余故記之。以使

子及子之子孫常思於此焉。苟能思之。雖欲逸且侈者不敢者矣。
 苟不耶逸且侈則。又深之居與所望山嶺可以共其不喬矣。遂書
 其言以爲記。

「福前香好」Y、
 山陽法帖には未だ見ないもの、一で、山陽が參河に遊歴し
 たことは之によつて明瞭である。依つて余は全文を掲げて世
 の山陽研究家の教を請ひたいと思ふ。
 版木は直紙版大で、又深居記は一面四行八字詰、その次の
 深谷氏所藏云々の一節は細字で一冊云々の七絶は二行三字詰
 の雄勁な草書である。逸首云々は七言十二律の二行六字詰行
 書で、次の雨歇云々粹綿々々は孰れも四行七字詰の行書であ
 るが、後者の落款に珍らしく珊瑚戲題と記し款印には未だ見
 たことのない。惡何有間侯印を捺して居る。宮原龍（潛叟節
 庵）の跋文にある如く、文化癸酉より六十年後の明治四年頃
 に發刊した様であるが、版木によると「頼山陽又深居帖」と
 命名し深谷家藏梓として、發賣書店が下の如く連記してあ
 る。京都三條通堺屋仁兵衛、同寺町通田中屋治兵衛、大坂心
 齋橋筋河内屋喜兵衛、同所河内屋和助、三州西尾松島屋榮八、
 尾州名古屋萬屋東平とあるから、いづれ刊行したとは思は
 れる。帖中の行草難解の字句があつて、左記法帖の全文中に
 誤謄もあらう。世上諸賢の御垂教を仰ぐ次第である。

文化十年歲在癸酉

山陽外史賴襄撰並書

賴襄之子成

深谷氏所藏。梨花白燕圖。絹本小幀。鈎染精緻。筆絲如線。而力入毫末。甚多風韻。的是名手。相傳爲董玄宰作。以詠白燕一律配之。幀大小相稱款其昌二字。癸酉冬月。過而一觀。主人求余數語。爲副。

山陽外史 賴襄

一鼎新茶一短檠。細談相對坐三更。窓前知有芭蕉樹。夜靜時聞墜露聲。

癸酉冬月。錄舊製爲觀翁。

山陽外史 賴襄

古之入

邀首鼠竊昔紛拏。昇平無復佩牛家。豐淺幾人風從虎。如今春林閑兔豕。此翁猶齋隱棲穩。夢雄熊踞與虺蛇。一十五孫出誰驥。敗群未有一羊邪。留容共慰聞猿恨。殺雞作黍燭生花。遺詩不邊芻狗度。墨豬上屏字歌斜。

癸酉閏月。遊參河宿深谷觀翁氏。偶見此畫。漫作十二句。

一句一辰。以寓祝頌之意。霎時卒作必多踈脫

山陽外史 賴襄

襄子成

雨歇泉聲益喧。木枯山貌尤瘠。今朝杖底千巖。昨日天邊寸。

山陽併題 襄子成

絳縹羅裳拂暮煙。成踐約納涼筵。紛々月色交燈影。不識檀印在那邊。

珊瑚戲題 襄子成

襄子成

參州深谷雅契。家藏山陽先生真跡。詩文若干首。聞先生少壯。游歷尾參之間。當時過訪所作也。以支幹考之。距今殆六十年矣。雅契今合爲一帖。豈恐其散逸。且欲以備臨池耶。寄書微一語於余。余謂先生所長。在學識。而詩文書畫皆其緒餘。故世貴其詞翰者。以其人取其詞翰也。非以詞翰取其人。也。目題以塞責云。不知雅契以爲何如。時在辛未嘉平月十又九日。

潛叟宮原龍

宮原龍

Handwritten text at the top of the page, possibly bleed-through or a separate section.

〇尾州名古を未知の八谷口辰三
あとい山陽との関係に物こあることか
れとい典に稽取味といふ名を
てきたといふといふを、
所かまふか印つて、
た、
の記が
湯れといふか、
の文を



遺留一此豊遷
不共五翁十
懸孫猶齊十
詩共五翁十
邊懸孫猶齊十

遺留一此豊遷
不共五翁十
懸孫猶齊十
詩共五翁十
邊懸孫猶齊十

三陽外陽史
文化年十在
史在

”航空燈臺建設

日本海沿岸最初の國家的大事業！

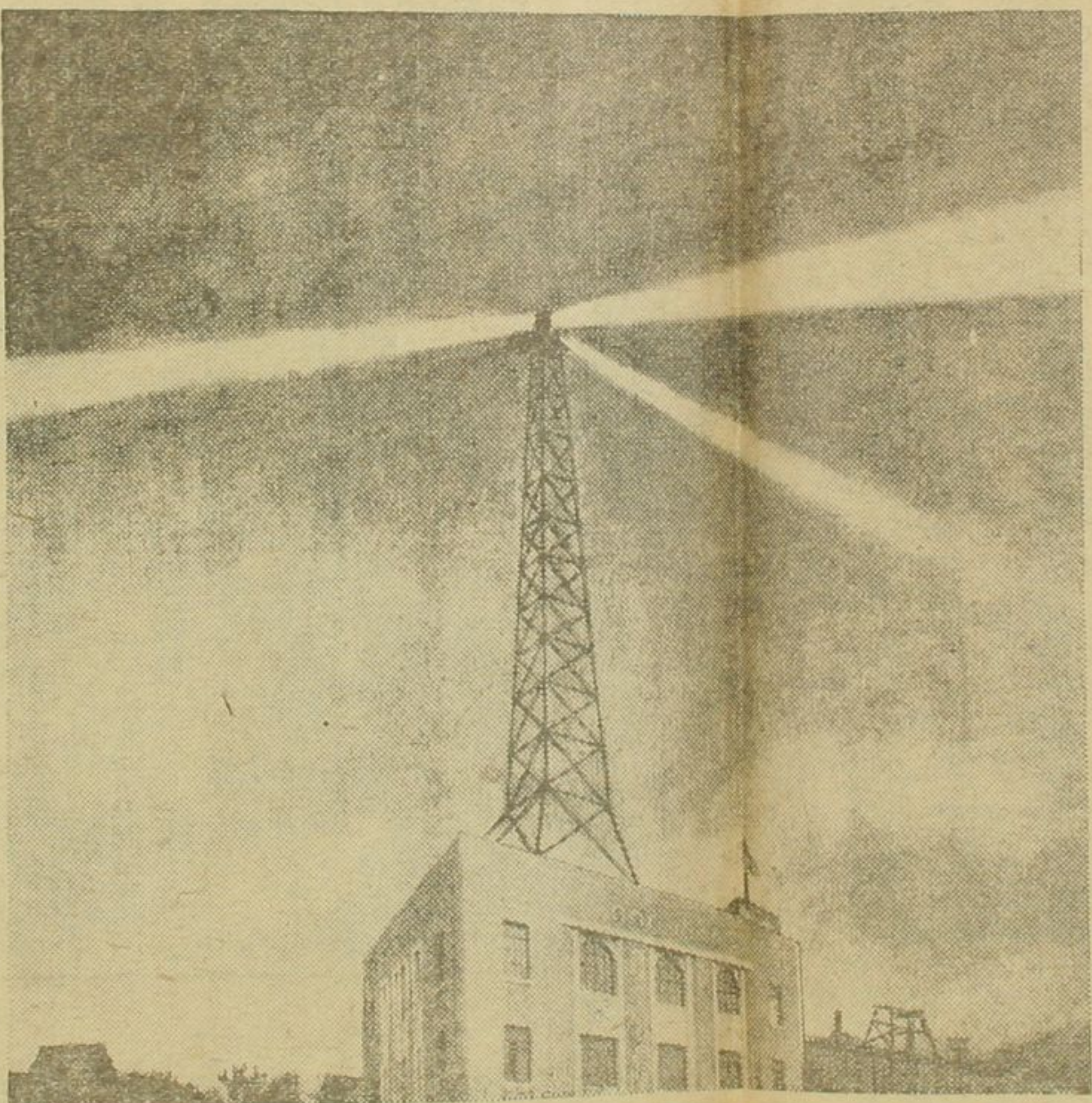
光芒實に卅五里

日本文化の燈火としてここに用霜二萬里の紙障を重ねたる我新國新聞はその記念事業として、さきに國家的某重大事業を實行する旨社告しましたが右は航空燈臺の建設であります。航空燈臺は太平洋沿岸には數多あつて、航空安全の指標として有用の働きを爲してをりますが、日本海沿岸には未だ一つだになく、日本海をへだて、蘇聯邦に對し國防上第一線に立つ當地方としては是非共なければならぬ國防上並びに國際航空の發達上最も重大なる役目をなすものであります。

本燈臺は二郡市一基に限られ當局の認可を要し全世界の飛行家の航空安全のしるべとなり、また

紙齡二萬二號突破

國家的記念事業



一、國事ある時は軍の防空本部となつて防衛を守護するの使命を有するものであるものとあります。今やわが邦が平和繁榮の業志はこゝに當局の職のらるゝところとなり、誠に時代と共に進んで止まざる日本海文化の燈火として名實共に具現するを得ますのは、獨り我社の光

榮とするところのみではなく、眞に縣民諸氏に酬ゆる念願の達成を欣幸とするものであります。本燈臺は新潟市中央に位する本社五十二尺の屋上に七十一尺の鐵塔を建てその頂上に三連閃光回轉燈器を取付けるもので、其燭光は實に二百六十六萬燭光、光芒三十五里、赤、綠、白の三色光は水平に照し、上空に一線の光をひき一分間に三回轉をなし、日没より日出に至るまで連夜煌々として越後、佐渡の上空を照すものであります（寫眞はその模型圖）

昭和十二年四月

新潟新聞社

大分文庫に就いて

寺社
官府再點
檢印

〔徑一寸〕

この時箱は新調したものも少くなかつたが、何故か第八十四合の箱だけはなく、従つて書目の目次の所には第八十四合と認め乍ら、本文にはその合なく、勿論在中の書名は記してない。尚法流相承の書六十二點は寺社奉行で點檢をしないで、寶生院から書出さしめてその儘寶生院代々相承法流印信目錄と題し、書目の末に附録として掲げてある。この時の分類は例へば第二十七合には往生傳、第四十五合には伊勢遷宮關係のもの、第六十四、六十五合には神祇物、第六十六、六十七合には國史漢籍物、第六十八合には古文書類、經論でも成るべく同じ様なものを一所に入れ、俱舍論、十住心論、妙印抄等は夫々取纏めてある。又第二十七、六十二、六十六、六十七下なごの合に國寶が固まつて入つて居るのも面白い。更に第一百一合には劔二柄が記してあつて、書目に劔のあるのは不思議なことで、無論書物の箱には吐入らないから別の長持の内に納めてある。これ等の圖書を數へる單位も色々あつて、文政書目によるに大體軸、卷、綴、搦、包、裏、袋、冊、折、帖、枚、通、紙(帛)、個、部などである。嘉永元年再點檢の時は次の如き朱印を首尾特に紙背欄目に押捺した。

寺社
官府再點
檢印

〔徑一寸〕

序年らその後この圖書は度々出納のあつた爲、文政四年當時の箱のみには收藏が出来なかつたものと見え、明治二十三年重野博士檢閲の時その示命によつて箱を新に造り、收納し切れぬ合の乙として、その合所收の圖書を分納したので、箱の數は書目にあるよりは増し、凡そ百二十五箱になつて居る。

昭和四年以來の整理は、文政の整理を以てしてもその所載尙簡に過ぎ、或は調査洩もあつて、現存のものについて精査すべき必要を認め、寶生院は黒板博士にこれを依頼したので、同博士指導の下に毎夏季休暇に東京帝國大學諸氏の援助により、藏

書の精査と新目録の編成に努め、爾來茲に七年、昨年を以てその業漸く成り、作成せる目録三櫃に及んで居る。前に述べた眞福寺善本目録正續輯二冊はその成果の一部と思はれる。

次に整理ではないけれども調査したことは明治年間に数度ある。それは明治十二年愛知縣廳より文庫經藏の位置、幅員、創立、儲書等を書上げしめた時が初であつて、この時は文政書目中より經論印信などの成るべく卷數の多いもの、第六十四合、第六十五合、第六十六合、第六十七合上、同下の神祇國史漢籍物、第一百一合の眞福寺關係秘書の類を抜出して目録帳を造つたに過ぎず、奥書なども一向詳しく掲げてなく、後に國寶に指定せられた貴重本も半分程は洩して居て、杜撰極まるものである。越えて同三十六年更に縣廳より布達があつた爲、寶生院寶物古器物古文書目録を題して、佛像三體、古器物十六點、畫幅五十六幅、古文書三千五十一點を書上げて居る。この目録は明治十二年の調査よりは篤念を入れた爲、その目録に記載洩の分も入つて居るから一致しない所があると上申し、文政書目に色々朱書の貼紙をなし、書目を入れた本箱の蓋裏には全體の藏書を三種に區別したことをなごも記して居る。その他同四十一年七月當山住職交替の際にも調査し、文政書目第一卷の卷首に朱書の貼紙をなし、現存せるもの、有無不明のもの、その他について書目に符號を附したことを記して居る。

書目と寫本地

享保十五年、文政四年及今回編成の書目、並に明治十二年、明治三十六年の目録帳のことは既述の通りであるが、この外第八十二合に大須北野山眞福寺寶生院經藏聖教目録、第八十五合に大須經藏目録、經藏目録稿本といふのがあるけれども、何れも甚だ不完全の様である。伊勢の神宮文庫には眞福寺目録、寶生院眞福寺藏書目録、寶生院眞福寺藏書目録拔書及寶生院經藏圖書目録の四部があるが、前三者は文政書目中神宮關係の所を寫したに過ぎず、後者はその全部の寫である。東京の靜嘉堂文庫にある寶生院經藏抄目は文政書目第十七卷を略似て居る。名古屋市立圖書館にあるのは勿論文政書目を寫したもので、又大阪府立圖書館にあるのは見たことはないけれども、明治四十二年印行大阪府立圖書館和漢圖書目録によれば、寫本二十冊、七よ

り九まで缺とあるから、これ亦文政書目と同様と思はれる。更に聞く所によれば、田中光顯伯爵も一部所藏せられて居るといふことであるが、未だ拜見の機會を得ない。此の如く他所にあるものは概ね文政書目の外に出でぬ様である。今回の眞福寺善本目録のことは重複を厭ひて此處では省略する。

次にこの夥しい圖書は大部分寫本で、それは何處で書寫されたかといふに、奥書のあるものだけについて調べて見ると、この眞福寺は勿論、高野山、根來寺、武藏高幡不動堂なきが最も多い。その他東海道では伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、甲斐、相模、武藏、常陸、東山道では近江、美濃、上野、下野、陸奥、北陸道では越前、加賀、越後、畿内では山城、大和、河内、和泉、攝津、中國では播磨、備中、四國では阿波、伊豫、九州では肥後、大隅等で殆んど全國に亘り、多くは寺院に於てなされ、又筆者も従つて多く僧侶である。尙書寫の年代は皇家中興時代より室町時代が最も多數にある。

國寶書籍の解説

一、漢書	食貨志	嘉保二年九月の裏書あり	一卷
一、瑠璃事集	卷十二、十四	十二に天平十九年七月、十四に天平十九年三月の奥書あり、十二の裏面に表制集第三、十四の裏面に表制集第二を寫す	二卷
一、古事記	僧賢瑜筆		三帖
一、將門記	(殘 缺)	承德三年正月の奥書あり	一卷
一、尾張國解文	(殘 缺)	正中二年八月の奥書あり	一卷
一、七大寺年表	(殘 缺)	永萬元年十月の奥書あり	二卷
一、日本靈異記	中卷下卷(上卷缺)		二卷
一、口遊	源爲憲撰		一冊

弘長三年二月の奥書あり

一、本朝文粹	卷十二、十四	十二の裏面に和漢朗詠集を寫す、十四に弘安三年七月の奥書あり	二卷
二、同	卷十四	建保五年六月の奥書あり	一冊
一、倭名類聚鈔	(殘 缺)		十三葉
一、空也上人誄	源爲憲撰	天治二年初冬月の奥書あり 延久二年八月の奥書あり	一卷
一、熊野三所權現御記文			一卷
一、熊野權現藏王殿造功日記			二卷
一、續本朝往生傳	大江匡房撰	建長五年十二月の奥書あり	一冊
一、拾遺往生傳	三善爲康撰		三帖
一、後拾遺往生傳	三善爲康撰	正嘉二年七月の奥書あり	三帖
一、三外往生記	沙門蓮禪撰	正嘉二年六月の奥書あり 正嘉二年正月の奥書あり	一帖
一、本朝新修往生傳	藤原宗友撰	元暦元年五月の奥書あり	一帖
一、弘法大師御傳		應安八年正月の奥書あり	二卷
一、弘法大師傳		貞和二年七月の奥書あり	一冊
一、弘法大師行化記		貞和二年六月の奥書あり	一卷
一、高野大師傳			一卷
一、弘法大師御入定勘決記		貞治三年黃鐘の奥書あり	一卷
一、弘法大師御入定勘決抄		承安三年十二月の奥書あり	一冊

一、高野口決

(零 本)

裏面に表制集第五を寫す

一卷

何れも紙本墨書で、漢書より高野口決に至るまで二十七點は明治三十八年四月四日、翰林學士詩集一點は明治四十一年四月二十三日國寶に指定せられた。

國寶書籍二十八點は國書と漢籍とに分けられ、漢籍は三點で、外は國書であるが、その漢籍は頗る珍らしいもの計りである。漢書食貨志は經籍訪古志には「文字適勤、真李唐原卷也」とあり、民の字の末筆がない。奈良朝時代の書寫と思はれ、漢書顔師古の注の原本を傳へたもので、宋元時代のものとは餘程異同があり、その事は楊守敬がこれを考勘し、古逸叢書の末に附して居る。卷末に「式部之印」といふ朱印が捺してあり、式部省の所藏であつたことが分る。裏は阿彌陀經義疏で、嘉保二年九月廿六日書寫畢釋慧聚の文字が見え、阿彌陀經義疏である爲、この書は今の世に傳はつたので、何時の世にかその裏書よりも本書の貴重なることを知るに及び、今の如き體裁となつたのである。瑠玉集二卷は共に天平十九年の書寫であることは奥書にもある通りで、藤原佐世の日本國見在書目錄によれば十五卷ある筈であるが、今僅にこの二卷が存するのみである。併し夙に支那に跡を絶つたものが天平時代の書寫によつて二卷なりともその面影を傳へ得たのは、眞に希觀の寶典といはねばならぬ。この撰者は分らぬが、支那文學史上より見て、この書と蒙求とは同一系統に屬して居る。内容は卷第十二では聰慧、壯力、鑒識、感應の四篇を立て、卷第十四では美人、醜人、肥人、瘦人、嗜酒、別味、祥瑞、恠異の八篇を設け、これに該當すべき説話を各種の書物より摘録したので、即ち六朝よりの習慣に従つて人の話頭に上るべき興味ある説話を蒐集したものであるが、これが寫經全盛の奈良朝に書寫せられたといふことは、その頃世に持囃されたといふ點でも注目せらるゝのみでなく、又初唐式の謹嚴なものであることも、益本書をして尊重せしめる所である。尙この書が奈良朝のみならず、平安朝以後にも行はれたことは、和漢朗詠集私注、三教指歸注等に引用せられてあるによつても分る。而してこの書の書き方に一種獨得の趣があつて、説

話の初に昔又は昔則の字を冠して居ることは、萬葉集の「昔有^二三男^一」、^三昔者有^二老翁^一」、伊勢物語の「昔男ありけり」、今昔物語の「今は昔」などいふのと暗合して居るといふよりは、寧ろ此を以て彼に做つたことを真に近いと思はれる。即ち昔といふ語を以て説話を起す形式の初の様で、これが今日の昔咄といふもの、形式の源流であるとすれば、瑠玉集の流は今に存すといつても差支ない。翰林學士詩集は初が闕けて居るから表題の名が分らぬ。服部宇之吉博士編佚存書目には君臣唱和集と名けてあるが、これが原名であるか疑問である。この詩集中許敬宗の詩が多いから或は許敬宗の撰かといふ説もある。御製題して太宗文皇帝とあるによつて唐高宗以後であらう。これも夙く支那に亡びた書であるに、延喜以前の寫本で残つて居ることは、唯一卷に過ぎないけれども誠に珍しいことである。

次に國書の方に移り、古事記は現存せる古事記の最も古いもので且一番善い本である。古事記は日本書紀と相並んで我が國古典の双璧といふべきものであるに拘らず、古寫本が更に残つて居らず。書紀は古く平安朝の寫があるが、古事記は漸くこの建徳二年文中元年眞福寺僧賢瑜の寫が最古である。この書寫年代及筆者のことは三卷共卷末の糊繼目に筆者名及年齢が墨書してあつて、これを同じく當山所藏の秘藏寶輪卷上及須臾肝要鈔の奥書より推して、即ち上中二卷は建徳二年、下卷は文中元年の書寫に係ることが分る。將門記は奥記に「天慶三年六月中文」にあつて即ち將門滅亡の四ヶ月後に記述せられたので、將門の亂の根本史料として學界に喧傳せられ、尾張國解文は永祚元年尾張國郡司百姓等が國守藤原元命の非違三十一條を擧げて陳訴せる歎狀で、當時の地方政治を研究するに屈竟の資料である。七大寺年表は南都七大寺諸大徳の綱位補任次第、諸寺堂塔建立、佛像安置、法會執行、その他を年代順に記したもので、白鳳十一年より起り延暦二十一年に終つて居るが、和銅元年の所に「作^二法隆寺^一」にあつて法隆寺建立年代についての一證據であり、天平寶字七年道鏡の所には「天智天皇孫志基親王第六子也」とあつて、道鏡皇胤論の根據である。

日本靈異記は弘仁年中南都藥師寺僧景戒の著述で、この二卷は平安朝末期の書寫で、この書の最も古い寫本であり、口遊は

天祿元年源爲憲が藤原爲光の長子松雄君の爲に草した教科書で、平安朝盛時の各方面を見るべき好史料といふべく、二種の本朝文粹中巻物の方には鐵槌傳といふ珍しいものが吐入つて居る。倭名類聚鈔は鎌倉時代の古寫本である所に價值があり、紙背には建長、正嘉、文永の年號ある文書、文永五年の假名具注曆などがある。

空也上人誄は空也上人の遷化を弔ひ生前の功德を累列して哀悼の意を表したもので、口遊と同じく源爲憲の草する所、鎌倉末期の寫本である。熊野三所權現御記文、熊野權現藏王殿造功日記は共に熊野關係の小巻物であるが、これら大きな紙も書振りもよく似て居て姉妹篇ともいふべき、熊野三所權現金峯金剛藏王降下御事、熊野王子眷屬があるに拘らず、これのみが國寶になつて居るのには不思議である。或は調査洩れかも知れない。前者は熊野三所權現御記文と表題にあるけれども、内容は外に金峯山金剛藏王御記文行者記文を援引して一巻としたもので、造功日記と共に熊野權現の習合思想を見るべき書である。又當山の神祇物は伊勢神宮關係のものが澤山あるが、この熊野關係二點のみが神祇物では國寶に指定せられて居る。續本朝往生傳より本朝新修往生傳まで五種の往生傳が揃つて居ることは珍しい。往生傳とは平生善根を積み、或は阿彌陀佛その他諸佛に廻向した人々が、その臨終に際し特殊の奇瑞を現はして極樂淨土に往生したことを、他人に想定せしめる様な行業を集録したもので、往生傳著作の重要な目的はその書を読む者に淨土往生の因縁を結ばしめる爲と、往生安樂國土の念願を讀者に勧進せん爲に外ならぬ。尚淨土往生の原因として頻に多數連續を尙ぶ思想が現はれ、念佛百萬遍とか、一日六萬遍の念佛を幾年續けたとか、法華經の讀誦二十五年に及んだとか、千體釋迦像を造立したとか、無量義經三十部を書寫したとかいふ類の行業が、すべての往生者に存して居ることは注目に値する。弘法大師御傳以下高野大師傳まで五種はすべて弘法大師の傳記であり、弘法大師御入定勘決記及同勘決抄は大師が高野で入定せられたか入滅せられたかを勘決して、入定説の正しいことを論定したもので、勘決抄はその抄略であるが、勘決記の史料としての價值はその奥書に存し、貞治三年那古野庄云々とあるのは、従來是那古野の文字の初見であつたが、近頃東洋文庫の江家次第裏書の紙背文書には那古野の文字のあることが發見せられ、この方

が古いから當山のは名古屋にある文献中の那古野の文字あるものゝ最も古いものとなつた。高野口決は高野山の建物佛像などのことが記してある。

以上國寶書籍二十八點中奥書のあるもので最も古いのは瑠玉集、最も新しいのは古事記であつて、今は主として史料としての側から述べたのであるが、返點、送假名、讀假名、連字符などによつて當時の訓み方が分り、國語史料としても少なぬ價值がある。尙これ等は大抵既に複製せられ、正續群書類從などに收められて居り、未だ世に出でぬのは熊野三所權現御記文、弘法大師御入定勘決記、同勘決抄、高野口決の數點に過ぎない。

結 語

當文庫及藏書の事は大體以上所述の通りであるが、當山第五十一世大槻快尊師は圖書の保存に力を盡し、先年黑板博士に依頼して文庫再建會を設け、元の經藏を東に移してその敷地に新庫建築に着手し、一昨夏上棟式を行ひ、既に外部の裝飾を終つたのに、去年六月急に師が遷化せられたのは誠に惜しむべきことである。自分は師とは中學以來の同窓で、従つて當山のことについては少からぬ關心を持ち、當山の機關雜誌「普門」の發行せらるゝや、創刊號以來終刊七十號まで一回も缺かさず執筆し續けた譯で、かゝる關係から後任の方に於ても、早く文庫内部の設備を整へ、藏書の永久に保存の方途の立つ共、篤學の士の緝閑の便を計られんことを望んで已まざるものである。

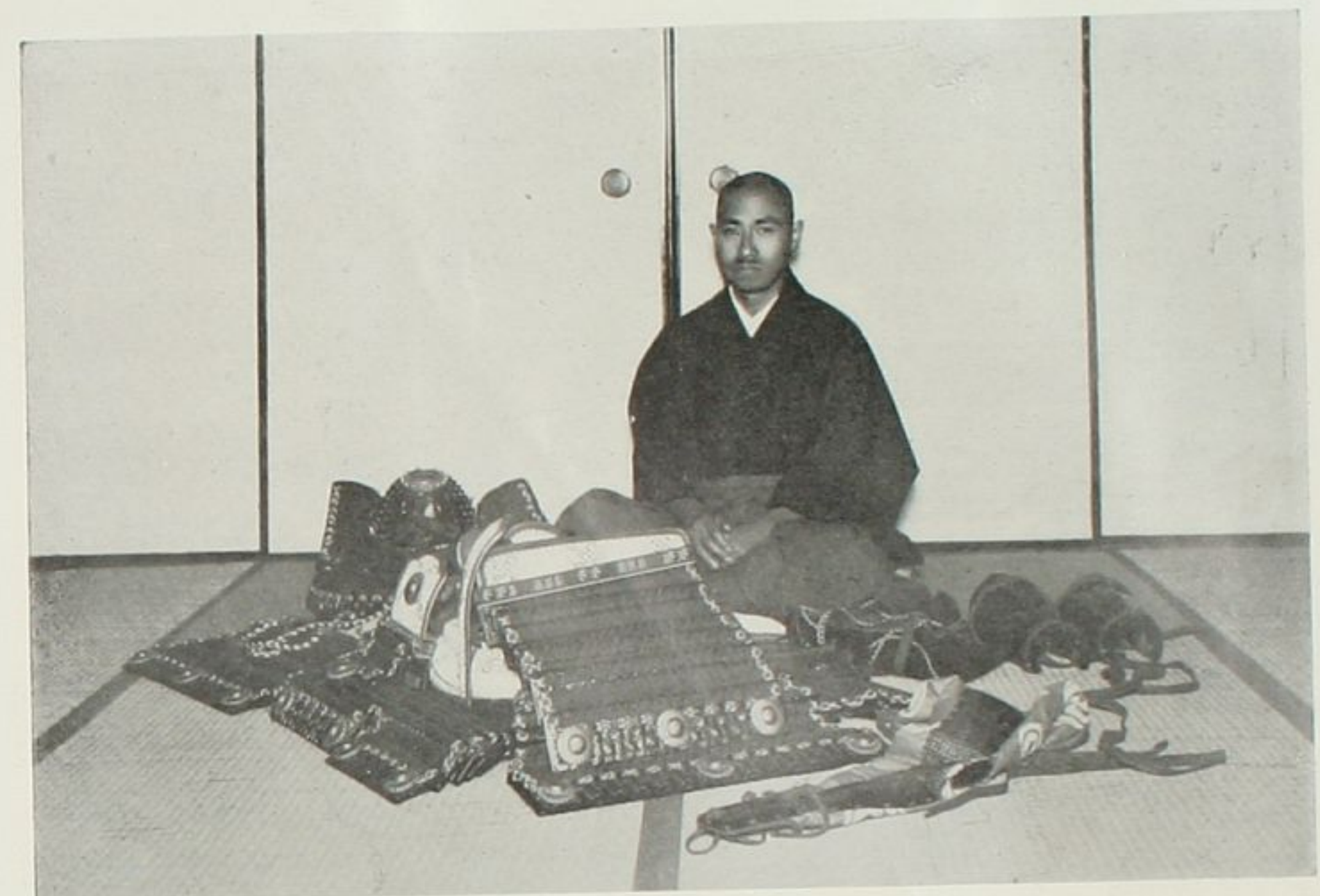
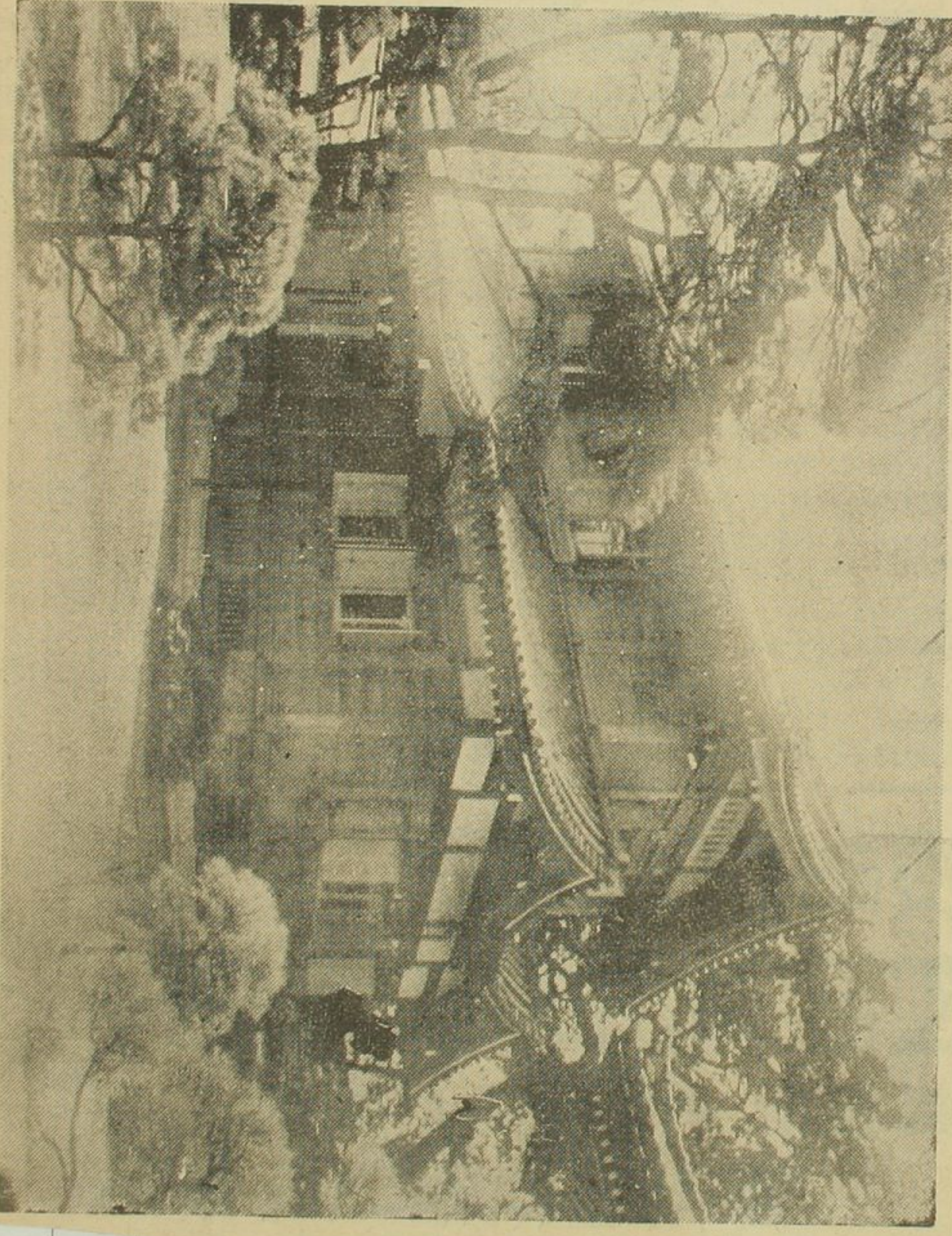
(六元)

國寶眞福寺本
名古屋溫故會刊行

尾 張 國 解 文 全一冊 帙入 實費金拾五圓(送料
金廿貳錢)
弘法大師御入定勘決記 全三張袋入 實費金壹圓(送料
金拾四錢)

發 賣 店
日 光 堂 書 店

兵の遺品を始め事變を物語る兵隊等を認められた顯忠府は四月一日一校有資格者に舞臺を差許さ
 れるが、廿一日宮内省から同府の寫眞を貸下けられた(寫眞は顯忠府)
 眞義烈を御記念あはせらるゝ畏き御召に依り御忠
 滿州上海南軍變並に濟南軍變に於ける皇軍將士の忠
顯忠府拜觀許さる



(撮影年七和昭) 生先郎八上山たれま包に鎧大



(撮影年一十和昭) (歳十二) 恭宗 珍明 (歳五十五) 美宗 珍明

明治大臣史談(三月抄) 掲載

教育勅語の渙發に翼賛せる人々(二)

渡邊幾治郎

元田永孚と井上毅

教育勅語渙發翼賛の最大功績者が、この兩人であることは、何人も異論のないことであらう。この兩人はその學問に於て、その思想に於て、極めて異なるものがあつた。井上が飽まで立憲進歩主義を抱き、政教分離、宮中・府中の別を唱ふるに對し、元田は飽まで孔孟の教を奉じ、皇道主義に立ち、政教一致、宮中・府中の一體を唱道してゐた。だが、兩人は各々その能くする所によつて、教育勅語の渙發を翼賛し奉つた。この兩人の功績は俄かに軒輊し難きものと思ふ。以下これを述べたい。

明治天皇が、明治十一年の御巡幸によつて、深く當代教育の弊を洞察せられたことは、天皇の聰明睿智にして、質實なる御人格に歸することは申すまでもないが、元田が明治四年以來侍讀・侍講として常侍側近に奉仕し、時勢の如何を問はず、忠孝彝倫の教、皇道國體の眞髓を説いて、聖明を啓沃し、輔導し奉つたことにも因ることを忘れてはならない。元田の人物に

就いては、とかくの評を試むる者もあるが、元田のごとく、我が國體・我が皇室の本體を曉得し、且つ畏れ多くも、明治天皇の御氣稟・御人となりを會得して、啓沃し、輔導し奉つた人はない。その點、元田は、實に大教育家であつたのである。

元田が、教育勅語のごとき、聖諭によつて、國體に基き、忠孝彝倫の教を述べて、國民教育を統一・刷新せんことを冀つてゐたことは、久しいことで、恐くば、屢制屢布以來、西洋思想が一世を風靡した頃からのことであらう。明治十二年九月には、明かにそのことが見られる。前述のごとく、明治十二年九月、伊藤が教育に對する御下問に奉答して、國教の議を斥けた時に、元田は教育附議を上つて、大に伊藤の説を駁して餘す所がない。

原議ニ云所ノ古今ヲ折衷シ、經典ヲ斟酌シ、一ノ國教ヲ建立シテ、以テ世ニ行フカ如キハ、必ス賢哲其人アルヲ待ツト、抑其人アルトハ誰ヲ指シテ云フ歟、今 聖上陛下君トナリ、師トナルノ御天職ニ任セラレ、而

シテ大臣・參議ノ其人アルニ際シ、是之ヲ置テ將ニ何ノ日ヲ待タントス、其政府ノ管制スヘキ所ニ非スト云フニ至テハ、則彼ノ政教ヲ分別セシ歐洲政府ノ專ラテラフ所ニシテ、我政教一致ヲ統轄セラル、天皇陛下ノ政府ニ於テ云フヘキ所ニ非サル也、其政 ノ權限ヲ分テ、人民ノ信否ヲ管制ス ヘカラサルカ如キハ、原議ノ如シ、

且國教ナル者、祖訓ヲ敬奉シテ忠孝ヲ闡明スルニ在ルノミ、必ス新タニ建立スルヲ待タサルナリ、但其要ハ、陛下ノ閣臣ト厚ク信シテ力行スルニ在ルノミ、彼ノ佛法・耶蘇教ノ如キ、吾敬神ト儒學ノ天道トニ似テ其說妄廢信スルニ足ラスト雖トモ、其死生・利害ノ慾心ニ切當スルヲ以テ、人々迷信深固動スヘカラサルニ至ルヲ見レハ、則國教ノ立ト立サルトハ、我ノ信ト不信トニ決スルノミ、

これによつても、彼が政教の一致を信じ、君を以て師とし、祖宗の遺訓を述べて、國教を樹立し、君民共にこれを信じ、力行することによつて、教育の革新・統一を冀つたことが明かである。政教一致・君を以て師とす、國教の樹立といふがごときには、伊藤・井上等の立憲進歩主義者の等しく反對した所であるが、我が特殊の國體を信じ、祖宗の遺訓といふがごとき傳統を信じ、祭政一致を理想とし、道德の淵源を皇

東京

元田永孚

教育勅語の渙發に翼賛せる人々(二)

元田が、教育勅語のごとき、聖諭によつて、國體に基き、忠孝彝倫の教を述べて、國民教育を統一・刷新せんことを冀つてゐたことは、久しいことで、恐くば、屢制屢布以來、西洋思想が一世を風靡した頃からのことであらう。明治十二年九月には、明かにそのことが見られる。前述のごとく、明治十二年九月、伊藤が教育に對する御下問に奉答して、國教の議を斥けた時に、元田は教育附議を上つて、大に伊藤の説を駁して餘す所がない。

原議ニ云所ノ古今ヲ折衷シ、經典ヲ斟酌シ、一ノ國教ヲ建立シテ、以テ世ニ行フカ如キハ、必ス賢哲其人アルヲ待ツト、抑其人アルトハ誰ヲ指シテ云フ歟、今 聖上陛下君トナリ、師トナルノ御天職ニ任セラレ、而



(展覧帖より)

平和建設への礎石

「神風」に託し英国民へ



本社が昨秋「神風」号飛行に當り、
社長の「神風」號飛行の
祝賀、塚越兩氏に英國民に呼び
掛ける左の如きメッセーヂを託
し、「神風」のロンドン到着と共に
右メッセーヂはタイムス紙を
始め各新聞紙を通じて全英國民に
傳達された。

世界平和の促進と人類福祉の
向上をその崇高なる目的と
し、文化の發達特に航空事業
の開拓發展に貢獻することを
以てその傳統的使命の一とし
て來ました我が朝日新聞は今
回イギリス皇帝ジョージ六世
陛下戴冠の大典に際し、特に
我等がその優秀を誇る祖國産
「神風」機に我社の有する最
も卓越せる兩飛行家を乗せて

最後に東京ロンドン間の新記
録の樹立を目指すものであり
ます、我等は來る五月執行行
はせられるイギリス新皇帝
陛下戴冠の御盛典に當り日英
親善關係の由緒深き歴史を想
起し、我等の舊き同盟國民に
對して衷心より祝慶の意を披
瀝し得るを最も欣幸とするも
のであります。

願れば日本航空界はその當初
より斯界の先進たる英國及び
英國民の指導援助に俟つこと
る多大なるものあり、今回朝
日新聞の壯舉が輝然たる國産
の高速度機によつて決行され
ることは、よつてもつて、躍
進日本航空界の目醒ましき發
展の姿を現實に御紹介ししか
英國國民の我が航空界に致さ
れた終始變らざる御好意に酬
いとすもの他にありません。

か、それは唯に日本航空最近の
發展段階を明示し得るのみな
らず、延いては此空による提
携の快舉によつて日英兩國民
の和合協力と相互の福祐促進
の上に寄與する處勢ならざる
べく、最後にかくして乗き
上げられたる東西兩大陸の雄
邦國民の堅き握手こそは動搖
常なき現下の國際情勢のさ中
において、明日の世界平和建
設のための最も貴重なる要石
たるべきを信じて疑はないの
であります。
願はくは貴國皇帝陛下の上に
天帝の護り豐かならんことを
昭和十二年四月二日
朝日新聞社長
上野 精一

朝日新聞の擧にして幸ひ所期
の成果を收め新記録を樹立し
て亞歐兩大陸の空を繋ぎ得ん

上野 精一

鄧石如小像 (品列陳院物博北河)



陳原刻

鄧石如。初名琰。以避清仁宗諱。以字行。一字頑伯。安徽懷寧人。居皖公山下。又號完白山人。生于清乾隆八年。性廉介。博學多聞。工篆隸刻印。客江寧梅孝廉家八年。縱觀孝廉所藏金石碑版。刻意臨摹。學既成。徧遊名山水。以書刻自給。游黃山。至歙嚳家。因張舉文編修之介。客于金輔之修撰家。張金並精小學。金氏家廟。楹楹皆刻石。修撰精心寫作。百易而成。及見山人書。乃斲去。洵山人書。重建之。其傾服如此。修撰稱之子曹文敏公文壇。文敏屬作四體千文。一日而成。文敏入都。強之同往。山人芒屨屨笠。策衛以行。抵都。劉文清公。陸耳山先生。踵門求識面。留都未久。與朝士寡合。出都。文敏爲之治裝。致之畢秋帆先生。居三年。辭歸。留之不可。爲置田宅。文敏病篤。語其子曰。鄧山人輒聯至。即以勒之墓門華表。及專祠前楹。包臣伯。錢十蘭。錢伯炯。李申耆諸先生。皆推山人書爲神品。嘉慶十年卒。年六十三。

小古在完

完白山人刻印



古海官
聖木會

揮汗
捺管
依

惠
中
誰

挂
舒
少



完白山人篆刻偶存

大齋玄酒

揮汗操刀管。相依患難中。

世人誰可托。持贈勉堂翁。

鄧完白が清朝後期の書道界に一新時期を畫した不世出の大家であつたことは何人も異論のないところであるが、その刻印もまた書に於けると同じく、一代の大

家であつた。當時篆刻の系統は、徽派と浙派と對立し、鄧完白の刀法は徽派に屬するものであるが、純然たる徽派ではなく、それより一步を出で別に一家を成した。丁仁(鶴庵)の評に、

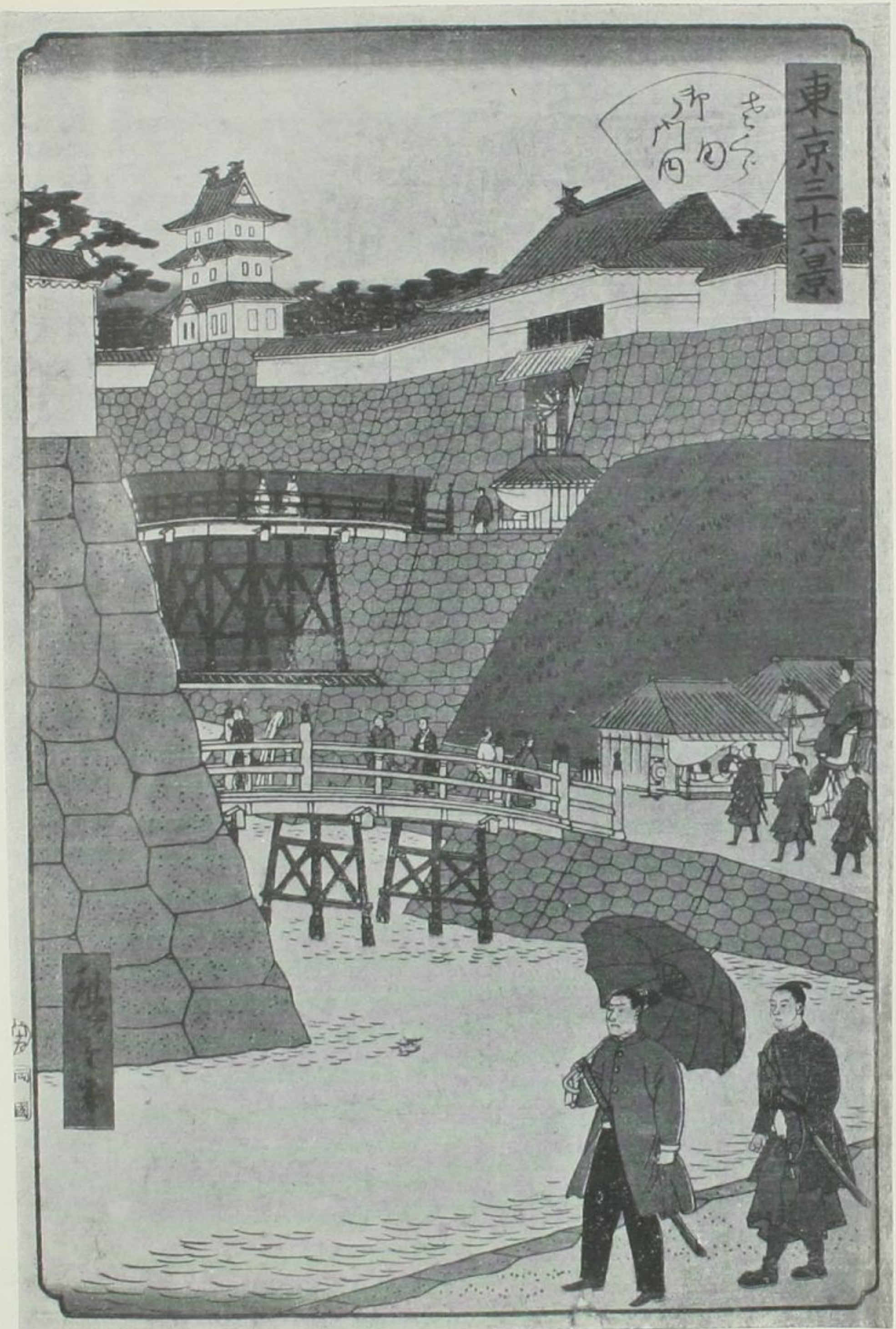
山人の印學は皖派の宗匠也、元明已前の印學には所謂派なし。清初、名流輩出、徽州に程穆倩あり、吾が杭に丁龍泓の兩先生あり、儼然として並び時ち、同上異曲なり。これに稱りて皖人は輒ち穆倩を宗とし、杭人は輒ち龍泓を宗とし、

遂に皖派、浙派の分あり。皖派中、欽の巴雋堂、胡城東、巴煜亭、鮑梁侶、績溪の周宗杭の如きは往々秦漢を規擬して力めて風格の遒上を求む。山人の間に崛起し、

書法剛健渾厚、曹文敏はその四體皆國朝第一たることを稱す。その篆刻もまたその書の如く、壘々獨造、秦漢に入して自ら一家を成し、人家の履跡に落ちたり入り、印は書より出づと。世に稱して鄧派と爲し、浙徽二派の外に於て鼎立し、

その弟子包世臣、吳熙載及び胡澐、閻啓泰等、氣象萬千、逼視すべからず。鋒勁剛健、姿態婀娜、後人謂ふ、その書は印より

るものに私淑した。その外、殊更鄧法をやらずに一旗幟をたてた楊沂孫の如きも、初めは鄧法を學び、その刻した印は殆んど鄧と似てゐるといふ如く、鐵筆を以て平生の絕技と爲し、篆刻界に大なる足跡を印せしに拘らず、その刻印の傳るものは極めて少なく、その印譜すら非常に少ない。完白山人篆刻偶存は、鄧完白に私淑せし陳氏が山人の刻印を集めて、初めて作つた印譜であるが、當初極めて



明治三年の二重橋大官登覽の景

も、初めは鄧法を學ぶ。その刻した印は殆んど魏と似てゐるといふ如く、鐵筆を以て平生の絶技と爲し、篆刻界に大なる足跡を印せしに拘らず、その刻印の傳るものは極めて少なく、その印譜すら非常に少ない。完白山人篆刻偶存は、鄧完白に私淑せし陳氏が山人の刻印を集めて、初めて作つた印譜であるが、當初極めて少数しか拵へなかつたから、今日にあつては、支那人でもこれを見たものは少ない。その後、この印譜から摹刻したものに汪爾度の傲古梅閣完白山人印癖といふがあるが、その本すら既に世の中に少ない。本誌がこの稀觀の印譜を掲載する

新 報 誌



家治政進新の年初治明

聲上井・信重隈大・文博藤伊りよ左て向列前

(助權幣造) 弘喜世久・(洲慶) 弘井中りよ左て向列後

(影撮てに寮幣造年二治明)

完白山人篆刻偶存

大瀧玄酒

揮汗操刀管。相依患難中。

世人誰可托。持贈勉堂翁。

鄧完白が清朝後期の書道界に一新時期を畫した不世出の大家であつたことは何人も異論のないところであるが、その刻印もまた書に於けると同じく、一代の大

家であつた。當時篆刻の系統は、徽派と浙派と對立し、鄧完白の刀法は徽派に屬するものであるが、純然たる徽派ではなく、それより一步を出で別に一家を成した。丁仁(鶴庵)の評に、

山人の印學は皖派の宗匠也、元明已前の印學には所謂派なし。清初、名流輩出し、徽州に程穆倩あり、吾が杭に丁龍泓の兩先生あり、曠然として並び峙ち、同工異曲なり。これに繼りて皖人は輒ら穆倩を宗とし、杭人は輒ら龍泓を宗とし、

遂に皖派、浙派の分あり。皖派中、歙の巴雋堂、胡城東、巴歷亭、鮑梁侶、績溪の周宗杭の如きは往々秦漢を規撫して力めて風格の遡上を求む。山人その間に崛起し

て自ら一子を成す。皖派の興るは穆倩に託始すと雖も、實は山人に於て集成せり。とある如く、徽派中鄧完白の上に出づるものなく、孔雲白の篆刻入門にも、

書法剛健渾厚、曹文敏はその四體書皆國朝第一たることを稱す。その篆刻もまたその書の如く、壘々獨造、秦漢に入入して自ら一家を成し、人家の履跡に落ち

ず、氣象萬千、逼視すべからず。鋒勁剛健、姿態婀娜、後人謂ふ、その書は印より入り、印は書より出づと。世に稱して鄧派と爲し、浙徽二派の外に於て鼎立して三なり。その衣鉢を傳ふるもの、その弟子包世臣、吳熙載及び胡澐、周啓泰等

を最著と爲し、上慶の徐三庚もまたその餘風を受く。といへる如く、その影響するところは頗る廣く、趙之謙の如きも直門にあらざ

るも之に私淑した。その外、殊更鄧法をやらずに一旗幟をたてた楊沂孫の如きも、初めは鄧法を襲ひ、その刻した印は殆んど鄧と似てゐるといふ如く、鐵筆を以て平生の絕技と爲し、篆刻界に大なる足跡を印せしに拘らず、その刻印の傳るものは極めて少なく、その印譜すら非常に少ない。完白山人篆刻偶存は、鄧完白に私淑せし陳氏が山人の刻印を集めて、初めて作つた印譜であるが、當初極めて

少数しか拵へなかつたから、今日にあつては、支那人でもこれを見たものは少ない。その後、この印譜から摹刻したものに汪爾度的做古梅閣完白山人印牒といふがあるが、その本すら既に世の中に少ない。本誌がこの稀觀の印譜を掲載する

